

**WebSphere® Development Studio Client for iSeries、Development
Studio Client Advanced Edition for iSeries**



バージョン 7.0



インストール・ガイド

**WebSphere® Development Studio Client for iSeries、Development
Studio Client Advanced Edition for iSeries**



バージョン 7.0



インストール・ガイド

ご注意

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、特記事項に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM WebSphere Development Studio Client for iSeries バージョン 7.0 (部品番号: 5724-A81) および IBM WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries バージョン 7.0 (部品番号: 5724-D46)、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

IBM 発行のマニュアルに関する情報のページ

<http://www.ibm.com/jp/manuals/>

こちらから、日本語版および英語版のオンライン・ライブラリーをご利用いただけます。また、マニュアルに関するご意見やご感想を、上記ページよりお送りください。今後の参考にさせていただきます。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： GC23-5877-03

WebSphere Development Studio Client for iSeries, Development Studio Client

Advanced Edition for iSeries

Version 7.0

Installation guide

発 行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2007.6

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 2007. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2007

目次

概説	1
IBM Installation Manager	1
IBM Rational Software 開発プラットフォーム	2
インストール要件	5
ハードウェア要件	5
ソフトウェア要件	6
ユーザー特権の要件	8
インストールの計画	9
インストールのシナリオ	9
インストールするフィーチャーの決定	10
フィーチャー	11
アップグレードおよび共存についての考慮事項	18
IBM 製品の共存についての考慮事項	18
アップグレードについての考慮事項	19
インストール・リポジトリ	20
Installation Manager でのリポジトリの設定	20
パッケージ・グループおよび共用リソース・ディレクトリ	21
既存の Eclipse IDE の拡張	22
電子イメージの検査と抽出	25
ダウンロード・ファイルの抽出	25
プリインストールの作業	27
インストールの各作業	29
CD からの WebSphere Development Studio Client のインストール: 作業の概要	29
ワークステーション上の電子イメージからの WebSphere Development Studio Client のインストール: 作業の概要	30
電子イメージからのインストール	30
共用ドライブにある電子イメージからの WebSphere Development Studio Client のインストール: 作業の概要	31
HTTP Web サーバー上のリポジトリからの WebSphere Development Studio Client のインストール: 作業の概要	31
HTTP Web サーバーへの WebSphere Development Studio Client の配置: 作業の概要	32
IBM Installation Manager の管理	35
Windows への Installation Manager のインストール	35
Installation Manager の始動	35
Installation Manager のアンインストール	35
Installation Manager のサイレント・インストールおよびサイレント・アンインストール	36
Installation Manager のサイレント・インストール	36

Installation Manager のサイレント・アンインストール	36
ランチパッド・プログラムからのインストール	37
ランチパッド・プログラムの開始	37
ランチパッド・プログラムからのインストールの開始	38
WebSphere Development Studio Client のインストール	39
IBM Installation Manager を使用した WebSphere Development Studio Client のインストール	39
IBM Installation Manager を使用した WebSphere Development Studio Client の軽量オプションのインストール	43
サイレント・インストール	47
応答ファイルの作成	47
サイレント・インストール・モードでの Installation Manager の実行	48
使用可能なすべての製品の検索とサイレント・インストール	49
現在インストール済みのすべての製品の更新のサイレント・インストール	49
応答ファイルのコマンド	50
サイレント・インストール設定コマンド	50
サイレント・インストール・コマンド	51
サンプル応答ファイル	55
サイレント・インストールのログ・ファイル	55
IBM Packaging Utility	57
Packaging Utility のインストール	57
Packaging Utility を使用した HTTP サーバーへの製品パッケージのコピー	58
WebSphere Development Studio Client の開始	61
インストールの変更	63
WebSphere Development Studio Client の更新	65
WebSphere Development Studio Client のアンインストール	67
オプション・ソフトウェアのインストール	69
Agent Controller のインストール	69
ハードウェア前提条件	70

サポートされるプラットフォーム	70	WebSphere Portal 構成リポジトリとしての DB2 または Oracle データベースの使用	88
サポートされる JVM	71	WebSphere Portal テスト環境バージョン 5.1.0.x のアンインストール	88
インストール・ファイルの配置	71	WebSphere Portal バージョン 6.0 テスト環境のイン ストール	89
ワークステーション (AIX、HP- UX、Linux、Windows、Solaris) への Agent Controller のインストール	72	CD-ROM または電子イメージからの WebSphere Portal テスト環境バージョン 6.0 のインストール	89
OS/400 (iSeries) への Agent Controller のインスト ール	80	WebSphere Portal の構成リポジトリとしての DB2、Oracle、または SQL Server データベース の使用	92
z/OS (OS/390) への Agent Controller のインスト ール	82	WebSphere Portal テスト環境バージョン 6.0 のア ンインストール	93
Agent Controller セキュリティー・フィーチャー の使用	83	ClearCase LT のインストール	93
ワークベンチと Agent Controller の互換性のまと め	84	ClearCase LT のインストールの説明およびリリー ス情報の検索	94
既知の問題および制限	84	Rational ClearCase LT のインストールの開始	95
CoOperative Development Environment および VisualAge for RPG バージョン 6.0 のインストール	85	Rational ClearCase LT ライセンス交付の構成	95
Host Access Transformation Services Toolkit バージョ ン 7.0 のインストール	86	Crystal Reports Server XI リリース 2 のインストー ール	96
IBM WebSphere Application Server バージョン 6.1 for Windows のインストール	86	Windows への Crystal Reports Server XI リリース 2 のインストール	96
WebSphere Portal テスト環境バージョン 5.1.0.x のイ ンストール	86	Crystal Reports Server XI リリース 2 のアンイン ストール	99
CD-ROM または電子イメージからの WebSphere Portal テスト環境バージョン 5.1.0.x のインスト ール	86	特記事項	101

概説

このインストール・ガイドでは、IBM® WebSphere® Development Studio Client for iSeries™ または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries のインストールおよびアンインストールについて説明します。バージョン 7.0 では、製品のインストールおよび保守に Installation Manager が使用されます。

注: インストール・ガイドの更新およびリリース情報については、以下を参照してください。

- WebSphere Development Studio Client for iSeries: <http://download.boulder.ibm.com/ibmdl/pub/software/awdtools/wdsc/v7/70/documents>
- WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries: <http://download.boulder.ibm.com/ibmdl/pub/software/awdtools/wdscae/v7/70/documents>

IBM Installation Manager

IBM Installation Manager は、ワークステーションへの WebSphere および Rational® 製品パッケージのインストールに役立つプログラムです。また、インストールしたそのパッケージおよびその他のパッケージの更新、変更、およびアンインストールにも役立ちます。パッケージには、Installation Manager でインストールするよう設計された製品、コンポーネントのグループ、または単一のコンポーネントなどがあります。

ワークステーションへの WebSphere Development Studio Client のインストールにおいてどのようなインストール・シナリオを用いるかに関係なく、パッケージのインストールには Installation Manager を使用します。

IBM Installation Manager では、さまざまな時間節約の機能を提供しています。この機能により、インストールしようとする項目、すでにインストール済みのソフトウェア・コンポーネント、インストール可能なコンポーネントを把握できます。また、更新が検索されるので、WebSphere または Rational 製品パッケージの最新版をインストールしているか確認できます。Installation Manager には、インストールする製品パッケージのライセンスを管理するツールも用意されています。また、パッケージの更新および変更用のツールも提供しています。Installation Manager は、製品パッケージのアンインストールにも使用できます。

IBM Installation Manager は、製品パッケージのライフ・サイクル全体でその保守を簡略化する、以下の 5 つのウィザードで構成されています。

- 「パッケージのインストール」ウィザードでは、インストールのプロセス全体を案内します。単純にデフォルトを受け入れて製品パッケージをインストールすることも、デフォルト設定を変更してカスタム・インストールを作成することもできます。製品パッケージのインストール前に、ウィザードを使用して実行した選択の完全な要約が提供されます。ウィザードでは、同時に 1 つ以上の製品パッケージをインストールできます。

- 「パッケージの更新」ウィザードでは、インストール済みの製品パッケージに対して使用可能な更新を検索します。更新には、その製品のリリース済みフィックス、新規フィーチャー、または新規バージョンなどがあります。その更新の内容の詳細がウィザードで提供されます。更新を適用するかどうかを選択できます。
- 「パッケージの変更」ウィザードでは、インストール済みパッケージの特定の要素を変更できます。製品パッケージの最初のインストール時に、インストールするフィーチャーを選択します。後で別のフィーチャーが必要になった場合は、「パッケージの変更」ウィザードを使用して、インストール済み製品パッケージにそのフィーチャーを追加できます。また、フィーチャーの除去、言語の追加または除去も可能です。
- 「ライセンスの管理」ウィザードは、パッケージのライセンスをセットアップする場合に役立ちます。ただし、このウィザードは WebSphere Development Studio Client パッケージのインストールには使用しません。WebSphere Development Studio Client にはフル・ライセンスが付属し、製品のインストール時に自動的にインストールされます。
- 「パッケージのアンインストール」ウィザードは、コンピューターから製品パッケージを除去する場合に役立ちます。同時に複数のパッケージをアンインストールできます。

IBM Rational Software 開発プラットフォーム

IBM Rational Software 開発プラットフォームは、複数の製品で共用される開発ワークベンチおよびその他のソフトウェア・コンポーネントが含まれた共通開発環境です。

この開発プラットフォームは、以下の製品で共用できます。

- WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries
- WebSphere Developer for zSeries®
- Host Access Transformation Services Toolkit
- Rational Application Developer
- Rational Functional Tester
- Rational Software Architect
- Rational Software Modeler
- Rational Systems Developer

WebSphere Development Studio Client について

IBM WebSphere Development Studio Client for iSeries には、ネイティブの i5/OS® アプリケーションのビルドおよび保守を行うためのツール、が提供されているほか、System i™ プラットフォーム上の Web サービス、Web、および Java™ アプリケーションを処理するためのツールも用意されています。

IBM WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries には、WebSphere Development Studio Client および Rational Application Developer のすべ

ての機能に加えて、シングル・サインオン・サポート、ポータルツール、および i5/OS 固有のアプリケーション用グラフィカル・ビューアーなど、追加の拡張 i5/OS 機能が含まれています。

インストール要件

このセクションでは、ソフトウェアの正常なインストールおよび実行のために必要である、ハードウェア、ソフトウェア、およびユーザー特権について説明します。

ハードウェア要件

本製品をインストールする前に、ご使用のシステムが最小ハードウェア要件を満たしているか確認してください。

WebSphere Development Studio Client for iSeries および WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries

以下は、WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries をインストールする場合のハードウェア要件です。

- 最小で Intel® Pentium® III 800 MHz プロセッサー (より上位を推奨)
- 768 MB RAM、1 GB RAM を推奨
- i5/OS 開発ツール、リモート・システム・エクスプローラー、および iSeries プロジェクトの場合
 - 256 MB RAM を推奨
- ディスク・スペース:
 - i5/OS 開発ツールのフィーチャーのみをインストールする場合、1GB のディスク・スペースが必須です。 500 MB はインストールの処理時にのみ使用され、インストールの完了後にはリカバリー可能です。
 - ディスク・スペースの要件は、インストールするフィーチャーに応じて増減します。
 - インストールでは以下が必要です。
 - WebSphere Development Studio Client for iSeries の場合は、最小で 5 GB のディスク・スペース。このディスク・スペースの一部 (500 MB) は、インストールの処理時にのみ使用され、インストールの完了後にはリカバリー可能です。
 - WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries の場合は、最小で 5.5 GB のディスク・スペース。このディスク・スペースの一部 (500 MB) は、インストールの処理時にのみ使用され、インストールの完了後にはリカバリー可能です。
 - アプリケーションの開発には追加のディスク・スペースが必要です。
 - この製品をインストールするための製品パッケージをダウンロードする場合は、追加のディスク・スペースが必要です。
 - NTFS ではなく FAT32 ファイル・システムを使用する場合は、追加のディスク・スペースが必要です。

- ご使用の環境変数 TEMP で指定されたディレクトリーには、500 MB の追加ディスク・スペースが必要です。
- モニター解像度: 最小で 1024 x 768
- Microsoft® マウスまたは互換のポインティング・デバイス
- CD-ROM ドライブ

ソフトウェア要件

製品をインストールする前に、ご使用のシステムがソフトウェア要件を満たしていることを確認してください。

システム

- i5/OS V5R3 または V5R4
- WebSphere Development Studio Client for iSeries および WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries V7.0 における i5/OS リリースのサポートは、i5/OS リリースが公式にサービスを終了した時点、または WebSphere Development Studio Client V7.0 が公式にサービスを終了した時点で終了します。
- 一部のコンポーネントには、追加のプログラム一時修正 (PTF) が必要です。PTF 情報は、オンライン (<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21044473>) で入手できます。必要な iSeries サーバー PTF についての詳細を参照するには、以下のようにしてください。
 1. 「リモート・システム・エクスプローラー」パースペクティブが開いていなければ、これを開きます。現在のパースペクティブの名前は、ウィンドウのタイトル・バーの左上の隅に表示されます。「リモート・システム・エクスプローラー」パースペクティブを開くには、「ウィンドウ」>「パースペクティブを開く」>「その他」と選択し、リストから「リモート・システム・エクスプローラー」を選択します。
 2. 「新規接続」>「iSeries」と展開して、ご使用の iSeries への接続を作成します。
 3. 新規接続を展開して、「iSeries オブジェクト」を右クリックします。メニューから「接続の検査」を選択します。これにより、必要な PTF のどれがすでにシステムにインストールされており、どれがインストールされていないかを示すダイアログが表示されます。
- i5/OS は、プログラム・オブジェクトが System i5™ に配置されているか、System i5 上のバックエンド・コードがアプリケーションに含まれている場合にのみ必要です。
- System i5 で RPG、COBOL、C、C++、CL、または DDS をコンパイルするには、リモート・システム・エクスプローラー (RSE) または CODE を使用します。その場合、5722-WDS (オプション 60 を含む) が System i5 にインストールされている必要があります。

ワークステーション

WebSphere Development Studio Client for iSeries および WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries

この製品では以下のオペレーティング・システムがサポートされています。

- Microsoft Windows® 2000 Professional (Service Pack 4 以降を適用)
- Microsoft Windows 2000 Server (Service Pack 4 以降を適用)
- Microsoft Windows 2000 Advanced Server (Service Pack 4 以降を適用)
- Microsoft Windows XP Professional (Service Pack 2 以降を適用)
- Microsoft Windows Server 2003 Standard Edition
- Microsoft Windows Server 2003 Enterprise Edition

注:

- このバージョンの IBM WebSphere Development Studio Client は、Eclipse IDE 3.2.1 以降と併せて使用するように開発されています。バージョン 3.2.1 以降の既存の Eclipse IDE の拡張のみ可能です。インストールされている Eclipse IDE を拡張することにより、WebSphere Development Studio Client for iSeries および WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries の一部のコンポーネントがサポートされます。

既存の Eclipse IDE を拡張するには、以下の Java Development Kit の JRE も必要です。

- IBM 32 ビット SDK for Windows、Java 2 Technology Edition バージョン 5.0 サービス・リリース 3、Sun Java 2 Standard Edition 5.0 アップデート 9 for Microsoft Windows

追加のソフトウェア要件

- README ファイルおよびインストール・ガイドの表示、および Standard Widget Toolkit (SWT) ブラウザー・ウィジェットのサポートには、以下の Web ブラウザーのいずれか 1 つが必要です。
 - Microsoft Internet Explorer 6.0 with Service Pack 1。
 - Mozilla 1.6 または 1.7。
 - Firefox 1.0.x または 1.5。
- このランチパッドは Mozilla 1.6 をサポートしていません。ブラウザーが Mozilla の場合、ランチパッドを実行するにはバージョン 1.7 以降である必要があります。
- ツアー、チュートリアル、およびデモンストレーション・ビューレットなどのマルチメディア・ユーザー支援を正常に表示するには、Adobe Flash Player バージョン 6.0 リリース 65 以降がインストールされている必要があります。
- サポートされているデータベース・サーバー、Web アプリケーション・サーバー、およびその他のソフトウェア・プロダクトについては、オンライン・ヘルプを参照してください。製品のインストール後に、「ヘルプ」>「ヘルプ目次」とクリックしてください。
- IBM WebFacing ツールを使用してビルドされたアプリケーションを実行するには、Internet Explorer 6.0 以降が必要です。
- i5/OS Web ツールを使用してビルドされたアプリケーションを実行するには、Internet Explorer 6.0 以降、または Mozilla V1.7 以降が必要です。
- TCP/IP がインストールおよび構成されている必要があります。
- アプリケーションのプロファイルを作成するには、JRE 1.4 以降がインストールされている必要があります。

- 以下のランタイム環境が、IBM WebFacing ツール、および i5/OS Web ツール・アプリケーション用にサポートされています。
 - ローカル側またはリモート側にインストールされている WebSphere Application Server Express (バージョン 5.1 または 6.0)
 - ローカル側またはリモート側にインストールされている WebSphere Application Server (バージョン 5.1、6.0、または 6.1)
- IBM WebFacing ツールまたは HATS のいずれかでのポータル開発には、WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries でのみ使用可能なポータル開発ツールが必要です。

ユーザー特権の要件

WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries をインストールするには、以下の要件を満たすユーザー ID を所持している必要があります。

- ユーザー ID に 2 バイト文字を含めることはできません。
- ローカル Windows ワークステーションの管理者グループに属するユーザー ID を所持している必要があります。

インストールの計画

いずれかの製品フィーチャーをインストールする前に、このセクションのすべてのトピックを読んでおいてください。正常にインストールするには、実効性のある計画を立て、インストール・プロセスのキーとなる側面を理解しておく役立ちます。

インストールのシナリオ

WebSphere Development Studio Client のインストール時に採用可能なシナリオは多数あります。

以下の要因から、インストールのシナリオが決定されと考えられます。

- インストール・ファイルにアクセスする場合のフォーマットおよび方式 (例えば、CD から、または IBM パスポート・アドバンテージ®からダウンロードしたファイルなど)。
- インストールのロケーション (例えば、個人のワークステーションにインストール可能であり、企業全体でインストール・ファイルを使用可能にすることもできます)。
- インストールのタイプ (例えば、Installation Manager の GUI を使用することも、サイレントにインストールすることも可能です)。

標準的に採用されるインストールのシナリオを以下に示します。

- CD からのインストール。
- ワークステーションにダウンロードされた電子イメージからのインストール。
- 共用ドライブにある電子イメージからのインストール。
- HTTP または HTTPS サーバー上のリポジトリからのインストール。

後ろの 3 つのシナリオでは、Installation Manager プログラムをサイレント・モードで実行して WebSphere Development Studio Client をインストールできます。

Installation Manager をサイレント・モードで実行する場合の詳細は、47 ページの『サイレント・インストール』を参照してください。

基本の製品パッケージのインストールと同時に、更新もインストールできます。

CD からのインストール

このインストール・シナリオでは、製品パッケージ・ファイルが収容されている CD があり、通常はご使用のワークステーションに WebSphere Development Studio Client をインストールします。この手順の概要については、29 ページの『CD からの WebSphere Development Studio Client のインストール: 作業の概要』を参照してください。

ワークステーションにダウンロードされた電子イメージからのインストール

このシナリオでは、IBM パスポート・アドバンテージまたは Entitled Software Support サイトからインストール・ファイルをダウンロードし、ご使用のワークステーションに WebSphere Development Studio Client をインストールします。この手順の概要については、30 ページの『ワークステーション上の電子イメージからの WebSphere Development Studio Client のインストール: 作業の概要』を参照してください。

共用ドライブにある電子イメージからのインストール

このシナリオでは共用ドライブに電子イメージを配置するため、単一のロケーションにある WebSphere Development Studio Client のインストール・ファイルに企業内の各ユーザーがアクセスできます。この手順の概要については、31 ページの『共用ドライブにある電子イメージからの WebSphere Development Studio Client のインストール: 作業の概要』を参照してください。

HTTP サーバー上のリポジトリからのインストール

このシナリオは、ネットワーク全体で製品をインストールする場合、最も速い方法です。このシナリオは共用ドライブからのインストールと異なり、HTTP Web サーバーに WebSphere Development Studio Client の製品パッケージ・ファイルを配置するため、IBM Packaging Utility を使用する必要があります。このユーティリティーは WebSphere Development Studio Client に付属し、HTTP Web サーバーから直接 WebSphere Development Studio Client をインストールする場合に使用可能なパッケージのフォーマットでインストール・ファイルをコピーします。パッケージが収容される HTTP Web サーバー上のディレクトリーは、リポジトリと呼ばれます。このシナリオでは、WebSphere Development Studio Client のみのインストール・ファイルがパッケージに配置されることに注意してください。この手順の概要については、31 ページの『HTTP Web サーバー上のリポジトリからの WebSphere Development Studio Client のインストール: 作業の概要』および 32 ページの『HTTP Web サーバーへの WebSphere Development Studio Client の配置: 作業の概要』を参照してください。

インストールするフィーチャーの決定

バージョン 7.0 では、インストールする WebSphere Development Studio Client のフィーチャーを選択することにより、ご使用のソフトウェア製品をカスタマイズできます。

IBM Installation Manager を使用して WebSphere Development Studio Client 製品パッケージをインストールする場合、使用可能な製品パッケージのフィーチャーがインストール・ウィザードに表示されます。このフィーチャーのリストから、インストールする項目を選択できます。デフォルトのフィーチャーのセットは自動的に選択されています (必須のフィーチャーなど)。Installation Manager は、各フィーチャー間のすべての依存関係を自動的に適用し、必須フィーチャーの消去を防止します。

リモート・システム・エクスプローラーのフィーチャーのみをインストールすると、ネイティブの i5/OS アプリケーションの開発用の、軽量の編集/コンパイル/デバッグ環境になります。このインストール・オプションは、 WebSphere Development Studio Client for iSeries および WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries の両方に対して適用可能であり、実行時に大量のリソースを必要としません。Web ツールのコンポーネントがインストールされないよう選択を制限することにより、このプログラムの実行に必要なメモリー所要量を大幅に削減できます。詳細は、5 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。

注: パッケージのインストールを完了した後でも、Installation Manager の「パッケージの変更」ウィザードを実行することにより、ご使用のソフトウェア製品に対するフィーチャーの追加および除去が可能です。詳細は、63 ページの『インストールの変更』を参照してください。

フィーチャー

以下の表には、インストールを選択することが可能な WebSphere Development Studio Client のフィーチャーが示されています。インストールするフィーチャーのデフォルトの選択は、異なる場合があります。あるフィーチャーがご使用の共用リソース・ディレクトリーに既に存在する場合は、そのフィーチャーはデフォルトでは選択されず、再度インストールはされません。

WebSphere Development Studio Client for iSeries フィーチャー

フィーチャー	説明	デフォルトでインストールを選択済み
i5/OS 開発ツール - リモート・システム・エクスプローラーおよび iSeries プロジェクト	ネイティブの i5/OS アプリケーションを開発するための統合ツールを提供します。これらのワークステーション・ツールにより、リモート i5 サーバーへの接続、ライブラリー、オブジェクト、メンバー、ジョブ、および IFS ファイルの管理、RPG、COBOL、CL、および DDS 用の豊富な編集機能がある最新のワークステーション・ベースのエディターを使用したソース・メンバーの編集、コンパイルの起動とエラー・フィードバックの取得、リモート検索とプログラムのリモート・デバッグの実行、などを行うことができます。	はい

フィーチャー	説明	デフォルトでインストールを選択済み
IBM WebFacing ツール	DDS ディスプレイ・ファイル・ソース・メンバーを既存の 5250 プログラム用の Web ベースのユーザー・インターフェースに変換するツールを提供します。	はい
i5/OS Web および Java のツール	i5/OS Web および Java のツールは、i5/OS ILE プログラム、サービス・プログラム、または OPM プログラム内のビジネス・ロジックとの通信に Web ベースのフロントエンドを使用した e-ビジネス・アプリケーションをビルドするためのツールを提供します。	はい
IBM WebSphere Application Server Express バージョン 5.1	ターゲットのランタイム環境として IBM WebSphere Application Server Express バージョン 5.1 を提供します。	いいえ
IBM WebSphere Application Server バージョン 5.1	ターゲットのランタイム環境として IBM WebSphere Application Server バージョン 5.1 を提供します。	いいえ
IBM WebSphere Application Server バージョン 6.0	ターゲットのランタイム環境として IBM WebSphere Application Server バージョン 6.0 を提供します。	いいえ
IBM WebSphere Application Server バージョン 6.1	ターゲットのランタイム環境として IBM WebSphere Application Server バージョン 6.1 を提供します。	はい

WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries フィーチャー

フィーチャー	説明	デフォルトでインストールを選択済み
i5/OS 開発ツール - リモート・システム・エクスプローラーおよび iSeries プロジェクト	ネイティブの i5/OS アプリケーションを開発するための統合ツールを提供します。これらのワークステーション・ツールにより、リモート iSeries サーバーへの接続、ライブラリー、オブジェクト、メンバー、ジョブ、および IFS ファイルの管理、RPG、COBOL、CL、および DDS 用の豊富な編集機能がある最新のワークステーション・ベースのエディターを使用したソース・メンバーの編集、コンパイルの起動とエラー・フィードバックの取得、リモート検索とプログラムのリモート・デバッグの実行、などを行うことができます。	はい
IBM WebFacing ツール	DDS ディスプレイ・ファイル・ソース・メンバーを既存の 5250 プログラム用の Web ベースのユーザー・インターフェースに変換するツールを提供します。	はい
i5/OS Web および Java のツール	i5/OS Web および Java のツールは、i5/OS ILE プログラム、サービス・プログラム、または OPM プログラム内のビジネス・ロジックとの通信に Web ベースのフロントエンドを使用した e-ビジネス・アプリケーションをビルドするためのツールを提供します。	はい

フィーチャー	説明	デフォルトでインストールを選択済み
拡張リモート・システム・エクスプローラーおよび iSeries プロジェクト	拡張リモート・システム・エクスプローラーおよび iSeries プロジェクトの各ツールは、iSeries プロジェクトの拡張チーム・サポート、および System i プラットフォーム上の Linux [®] on POWER [™] および IBM AIX 5L [™] の各オペレーティング・システム用のリモート・デバッグ機能を提供します。	はい
IBM アプリケーション・ダイアグラム・コンポーネント	ネイティブの i5/OS アプリケーションのさまざまなリソースとその相互の関係のグラフィカルなビューを作成するツールを提供します。これには、ILE RPG および ILE COBOL ソースの呼び出しグラフを示すダイアグラム、およびプログラムとサービス・プログラムの各オブジェクトのバインディング関係を示すダイアグラムなどがあります。	はい
i5/OS ログおよびトレース・アナライザー	i5/OS ジョブ・ログおよびメッセージ・キューからのメッセージを共通ベース・イベント・フォーマットに変換するツールを提供します。結果の共通ベース・イベントは、プロファイルおよびロギングのツールで使用可能であり、問題判別に役立ちます。	はい
拡張 IBM WebFacing ツール	IBM WebFacing ツール用のシステム画面、ポータル、およびシングル・サインオンのサポートを提供します。	はい
拡張 i5/OS Web および Java のツール	Web ツールで i5/OS プログラム呼び出し JCA コネクターおよびシングル・サインオンをサポートするツールを提供します。	はい

フィーチャー	説明	デフォルトでインストールを選択済み
Screen Designer のテクノロジー・プレビュー	Screen Designer は、DDS ディスプレイ・ファイルのグラフィカルな編集機能を提供するテクニカル・プレビューです。Screen Designer は、リモート・システム LPEX エディターの DDS 編集機能にグラフィカルなデザイン環境を統合します。	はい
Web 開発ツール	JavaServer Faces、JavaServer Pages、サーブレット、および HTML を使用した J2EE Web アプリケーションをビルドするツールを提供します。	はい
Struts ツール	Apache Struts フレームワークを使用した J2EE Web アプリケーションを開発するためのツールです。	いいえ
Crystal Reports ツール	Crystal Reports が提供するレポート作成機能が必要なアプリケーションを開発するためのビジュアル・ツールを提供します。	はい
J2EE および Web サービス開発ツール	J2EE アプリケーションおよび Web サービスを開発するためのツールを提供します。	はい
Java クライアント・アプリケーション・エディター (JVE)	SWT、AWT、または Swing UI ライブラリーを使用したグラフィカル・ユーザー・インターフェース Java クライアント・アプリケーションのビルドおよびテスト用のツールを提供します。	はい
ビジュアル・エディター	Java クラス、C++ コード、エンタープライズ Bean、データ・テーブル、および XML スキーマを作成するためのグラフィカル編集環境を提供します。	はい

フィーチャー	説明	デフォルトでインストールを選択済み
コード・レビュー	ユーザーのコードに対してルールの整合性およびベスト・プラクティスを検査します。コード・レビューでは、可能性のある問題を強調表示し、品質を改善するコード変更を提案します。場合によっては、整合させるフィックスを自動的に適用できます。	はい
テストおよびパフォーマンス・ツール・プラットフォーム (TPTP)	アプリケーションをテストする Eclipse のツールを提供します。ツールの機能には、プロファイル作成、モニター、ロギング、コンポーネント・テスト (JUnit)、および静的分析またはコード・レビューなどがあります。	はい
J2EE コネクタ (J2C) ツール	CICS® および IMS™ システム用の J2C クライアント・アプリケーションの作成に役立つ強固なツールのセットを提供します。 COBOL、PL/I、および C の各言語用の Java マーシャル・コードの作成には、データ・バインディング・ウィザードを使用します。	いいえ
Rational ClearCase® SCM アダプター	IBM Rational ClearCase SCM および ClearCase MVFS の各プラグインを提供し、ClearCase バージョン化オブジェクト・ベース (VOB) においてバージョンを管理したソフトウェア成果物を作成できるようになります。これらのプラグインでは、ClearCase VOB およびビュー・サーバーもインストール済みである場合に、スナップショット・ビューおよびダイナミック・ビューを使用します。	はい
Rational RequisitePro® 統合 (Windows の場合のみ)	IBM Rational RequisitePro がインストール済みである場合に、要求とソフトウェア成果物の間に追跡可能性がある、緊密に統合された要求管理ツールを提供します。	いいえ

フィーチャー	説明	デフォルトでインストールを選択済み
Rational Unified Process® (RUP®) プロセス・アドバイザーおよびプロセス・ブラウザー	ソフトウェアを開発し、IBM Rational ソフトウェア開発プラットフォームを使用する場合のコンテキストに依存したガイダンスを提供するプロセス・アドバイザー、および現行のタスク、成果物、およびツールの関連付けに役立つプロセス・ブラウザーを提供します。	はい
変換オーサリング	カスタム変換の作成、既存の変換のカスタマイズのためのツールを提供します。変換は、モデル・コンテンツおよび実装コードを生成するタスクを自動化します。	いいえ
プラグイン開発環境 (PDE)	Eclipse 環境の拡張に使用できる Eclipse プラグインの作成、開発、テスト、デバッグ、およびデプロイのためのツールを提供します。	いいえ
Java エミッター・テンプレート (JET) 拡張性機能	JET テクノロジーの拡張性機能を使用することにより、JET 変換を開発し、プログラミング・インターフェース (API)、拡張ポイント、およびユーティリティを使用して JET エンジンをコントロールできます。	いいえ
データ・ツール	データベースの定義および処理のためのリレーショナル・データベース・ツールを提供します。テーブル、ビュー、およびフィルターの定義とその処理、SQL ステートメントの作成とその処理、DB2® ルーチンの作成とその処理、および SQLJ ファイルの作成とその処理が可能です。また、SQL DDL、DADX、および XML ファイルを生成するツールも使用できます。	いいえ

フィーチャー	説明	デフォルトでインストールを選択済み
ポータル・ツール	ポータル・アプリケーションの作成、カスタマイズ、テスト、デバッグ、およびデプロイのためのツールを提供します。ポータル開発ツールは、IBM WebSphere Portal パージョン 5.1 および 6.0 をサポートしています。	はい
WebSphere Application Server 開発ツール	WebSphere Application Server 開発のためのツールを提供します。	はい
WebSphere Application Server コンパイル時依存コンポーネント	IBM WebSphere Application Server 用のアプリケーションのビルド、コンパイル、デバッグ、およびデプロイに必要です。	はい
IBM WebSphere Application Server Express パージョン 5.1	ターゲットのランタイム環境として IBM WebSphere Application Server Express パージョン 5.1 を提供します。	いいえ
IBM WebSphere Application Server パージョン 5.1	ターゲットのランタイム環境として IBM WebSphere Application Server パージョン 5.1 を提供します。	いいえ
IBM WebSphere Application Server パージョン 6.0	ターゲットのランタイム環境として IBM WebSphere Application Server パージョン 6.0 を提供します。	いいえ
IBM WebSphere Application Server パージョン 6.1	ターゲットのランタイム環境として IBM WebSphere Application Server パージョン 6.1 を提供します。	はい

アップグレードおよび共存についての考慮事項

本製品の以前のバージョンを所有している場合や、同じワークステーション上への複数の Rational Software Development Platform 製品のインストールを計画されている場合は、このセクションに記載された情報を検討してください。

IBM 製品の共存についての考慮事項

一部の製品は、同じパッケージ・グループにインストールされた場合に共存し、機能を共用するよう設計されています。パッケージ・グループとは、1 つ以上のソフトウェア製品またはパッケージをインストール可能なロケーションです。各パッケージをインストールする場合に、そのパッケージを既存のパッケージ・グループにインストールするか、または新規のパッケージ・グループを作成するかを選択します。IBM Installation Manager により、共用可能に設計されていない製品、または

バージョンの許容範囲およびその他の要件に合致していない製品はブロックされます。同時に複数の製品をインストールする場合、その製品はパッケージ・パッケージを共用可能である必要があります。

リリースの時点では、パッケージ・グループにインストールされた場合に機能を共用できる製品は以下のとおりです。

- WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries
- WebSphere Developer for zSeries
- Host Access Transformation Services Toolkit
- Rational Application Developer
- Rational Software Architect
- Rational Functional Tester
- Rational Software Modeler
- Rational Systems Developer

1 つのパッケージ・グループに、任意の数の適格である製品をインストールできます。製品をインストールすると、その機能は、そのパッケージ・グループ内の他のすべての製品と共用されます。1 つのパッケージ・グループに開発用製品およびテスト用製品をインストールした場合は、その製品のいずれかを開始すると、ご使用のユーザー・インターフェースで開発用およびテスト用の両方の機能が使用可能になります。モデリング・ツールがある製品を追加した場合は、そのパッケージ・グループ内のすべての製品で開発、テスト、およびモデリングの機能が使用可能になります。

ある開発用製品をインストールした後に機能が拡張された開発用製品を購入し、その製品を同じパッケージ・グループに追加すると、その拡張された機能が両方の製品で使用可能になります。上位の機能がある製品をアンインストールした場合は、オリジナルの製品が残ります。これは、Rational Software Development Platform のバージョン 6 製品の「アップグレード」の動作からの変更点であることに注意してください。

注: 固有のロケーションにインストールされた各製品は、1 つのパッケージ・グループにのみ関連付けられます。製品を複数のパッケージ・グループに関連付ける場合は、複数のロケーションにインストールする必要があります。Rational Functional Tester は、1 つのコンピューターでは 1 つのロケーションにのみインストール可能です。

アップグレードについての考慮事項

ワークステーション上に既にインストールされている以前のバージョンの WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries は、バージョン 7.0 にアップグレードできません。ただし、WebSphere Development Studio Client バージョン 7.0 は以前のバージョンと共存できます。

ワークスペース、プロジェクト、および成果物は、WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for

iSeries のバージョン 5.1.2 または 6.x からバージョン 7.0 にマイグレーションできます。詳細は、V7.0 オンライン・ヘルプにあるマイグレーションについての資料を参照してください (「ヘルプ」>「ヘルプ目次」と選択し、「**WebSphere Development Studio Client for iSeries**」>「インストールとマイグレーション (Installing and migrating)」を参照してください)。

重要: 最初に WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries バージョン 7.0 を開始した場合のデフォルトは、新規ワークスペースであることに注意してください。既存のワークスペースをバージョン 7.0 で開く場合は、必ずマイグレーションに関する資料を参照した後に実行してください。

以前のバージョンの Agent Controller がある場合は、それを停止してアンインストールし、残されたファイルをすべてクリーンアップしてから、このバージョンの Agent Controller をインストールしてください。詳細は、Agent Controller のインストールを参照してください。

インストール・リポジトリ

IBM Installation Manager では、指定したリポジトリのロケーションから製品パッケージを取得します。

ランチパッドを使用して Installation Manager を開始すると、リポジトリ情報が Installation Manager に渡されます。Installation Manager を直接開始した場合は、インストールする製品パッケージを含むインストール・リポジトリを指定する必要があります。『Installation Manager でのリポジトリの設定』を参照してください。

組織によっては、独自の製品パッケージをバンドルし、イントラネットでホストしている場合があります。このタイプのインストール・シナリオについて詳しくは、10 ページの『HTTP サーバー上のリポジトリからのインストール』を参照してください。システム管理者は、正しい URL をユーザーに連絡する必要があります。

デフォルトでは、IBM Installation Manager は、各 Rational Software Development 製品に組み込まれている URL を使用して、インターネット経由でリポジトリ・サーバーに接続します。その次に、製品パッケージや新規フィーチャーを検索します。

Installation Manager でのリポジトリの設定

launchpad プログラムから WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries のインストールを開始する場合は、インストールする製品パッケージが含まれているリポジトリのロケーションが IBM Installation Manager で自動的に定義されます。ただし、Installation Manager を直接開始する場合 (例えば、Web サーバー上のリポジトリから WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries をインストールする場合)、製品パッケージをインストールするには、リポジトリの設定 (製品パッケージを含んでいるディレクトリの URL) を Installation Manager で指定する必要があります。これらのリポジトリ・ロケーションは、「設定」ウィンドウの「リポジト

リー」ページで指定します。デフォルトでは、Installation Manager は、各 Rational Software Development 製品に組み込まれている URL を使用してインターネット経由でリポジトリ・サーバーに接続し、インストール可能なパッケージおよび新規機能を検索します。組織によっては、イントラネット・サイトを使用するようリポジトリをリダイレクトする必要がある場合もあります。

注: インストール・プロセスを開始する前に、必ず管理者からインストール・パッケージのリポジトリ URL を入手してください。

Installation Manager でリポジトリ・ロケーションを追加、編集、または削除するには、以下を実行します。

1. Installation Manager を開始します。
2. Installation Manager の「開始」ページで、「ファイル」>「設定」をクリックし、次に「リポジトリ」をクリックします。「リポジトリ」ページが開き、使用可能なリポジトリ、そのロケーション、およびアクセス可能であるかどうかが表示されます。
3. 「リポジトリ」ページで、「リポジトリの追加」をクリックします。
4. 「リポジトリの追加」ウィンドウで、リポジトリ・ロケーションの URL を入力するか、またはその URL を参照してファイル・パスを設定します。
5. 「OK」をクリックします。HTTPS リポジトリ・ロケーションを入力した場合は、プロンプトが表示されて、ユーザー ID およびパスワードを入力するよう要求されます。新規のリポジトリ・ロケーションまたは変更されたリポジトリ・ロケーションがリストされます。リポジトリがアクセス不可になっている場合は、「アクセス可能」列に赤い x が表示されています。
6. 「OK」をクリックして終了します。

注: Installation Manager で、インストール済みパッケージのデフォルト・リポジトリ・ロケーションが検索されるようにするには、「リポジトリ」設定ページで「インストールおよび更新中にリンクされたリポジトリを検索する (Search the linked repositories during installation and updates)」を選択する必要があります。この設定はデフォルトで選択されています。

パッケージ・グループおよび共用リソース・ディレクトリー

IBM Installation Manager を使用して WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries パッケージをインストールする場合は、パッケージ・グループおよび共用リソース・ディレクトリーを選択する必要があります。

パッケージ・グループ

インストールのプロセスにおいて、WebSphere Development Studio Client パッケージに対してパッケージ・グループを指定する必要があります。パッケージ・グループは、同一グループ内の各パッケージ間でリソースを共用するためのディレクトリーを示します。Installation Manager を使用して WebSphere Development Studio Client パッケージをインストールする場合は、新規のパッケージ・グループを作成するか、または既存のパッケージ・グループにパッケージをインストールできま

す。(一部のパッケージでは、パッケージ・グループを共用できない場合があります。この場合は、既存のパッケージ・グループを使用するオプションが使用不可になります。)

同時に複数のパッケージをインストールする場合は、すべてのパッケージが同一のパッケージ・グループにインストールされることに注意してください。サポート対象パッケージのリストを表示するには、18 ページの『IBM 製品の共存についての考慮事項』を参照してください。

パッケージ・グループには名前が自動的に割り当てられますが、そのパッケージ・グループのインストール・ディレクトリーは選択する必要があります。

製品パッケージが正常にインストールされてパッケージ・グループが作成された後は、そのインストール・ディレクトリーは変更できません。インストール・ディレクトリーには、そのパッケージ・グループにインストールされた WebSphere Development Studio Client 製品パッケージに固有のファイルおよびリソースが収容されます。別のパッケージ・グループにより使用される可能性のある製品パッケージ内のリソースは、共用リソース・ディレクトリーに配置されます。

共用リソース・ディレクトリー

共用リソース・ディレクトリー は、インストール成果物が配置されるディレクトリーであり、1 つ以上のパッケージ・グループにより使用できます。

重要: 共用リソース・ディレクトリーは、最初にパッケージをインストールするときに 1 度だけ指定できます。このディレクトリー用には、最大容量のドライブを使用することが推奨されます。すべてのパッケージをアンインストールしない限り、このディレクトリー・ロケーションは変更できません。

既存の Eclipse IDE の拡張

WebSphere Development Studio Client 製品パッケージをインストールする場合、既にコンピューターにインストール済みの Eclipse 統合開発環境 (IDE) に、WebSphere Development Studio Client パッケージに含まれる機能を追加して拡張することを選択できます。

IBM Installation Manager を使用してインストールする WebSphere Development Studio Client パッケージには、あるバージョンの Eclipse IDE、すなわちワークベンチがバンドルされています。このバンドルされたワークベンチは、Installation Manager パッケージ内の機能を提供するための基本のプラットフォームです。ただし、ワークステーションに既存の Eclipse IDE がある場合は、拡張するオプション、すなわち、WebSphere Development Studio Client パッケージで提供されている追加機能を IDE に追加するオプションがあります。

既存の Eclipse IDE の拡張が必要な場合は、例えば、WebSphere Development Studio Client パッケージで提供される機能を獲得したいが、WebSphere Development Studio Client パッケージの機能を使用するときに現在の IDE のプリファレンスおよび設定を使用したい場合などです。また、すでに Eclipse IDE を拡張してある、インストール済みのプラグインを処理したい場合もあります。

既存の Eclipse IDE を拡張するには、「パッケージのインストール」ウィザードの「ロケーション」ページで、オプション「**既存の Eclipse IDE の拡張 (Extend an existing Eclipse IDE)**」を選択します。

拡張する既存の Eclipse IDE はバージョン 3.2.1、および eclipse.org からの最新の更新である必要があります。Installation Manager により、指定した Eclipse インスタンスがインストール・パッケージの要件に適合しているか検査されます。

重要: インストールされている Eclipse IDE を拡張することにより、WebSphere Development Studio Client for iSeries および WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries の一部のコンポーネントがサポートされます。

注: WebSphere Development Studio Client に更新をインストールするには、ご使用の Eclipse のバージョンを更新しなければならない場合があります。前提条件となる Eclipse バージョンの変更点についての情報は、更新リリースの資料を参照してください。

電子イメージの検査と抽出

IBM パスポート・アドバンテージからインストール・ファイルをダウンロードする場合は、WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries をインストールする前に、圧縮ファイルから電子イメージを抽出する必要があります。そのイメージを抽出する前には、ダウンロード・ファイルの完全性を検査する必要もあります。

ダウンロード・ファイルのチェックサムを公開している MD5 の値と比較し、ダウンロード・ファイルが破損していたり不完全でないか確認します。

ダウンロード・ファイルの抽出

同一のフォルダーにすべての解凍ファイルが収容されるよう、各圧縮ファイルを同じディレクトリーに抽出します。

プリインストールの作業

製品をインストールする前に、以下の手順を実行しておきます。

1. セクション 5 ページの『インストール要件』で説明されている要件をシステムが満たしていることを確認します。
2. ユーザー ID が、製品のインストールに必要なアクセス権を持っていることを確認します。8 ページの『ユーザー特権の要件』を参照してください。
3. セクション 9 ページの『インストールの計画』を参照します。特にトピック 18 ページの『アップグレードおよび共存についての考慮事項』に注意してください。

インストールの各作業

以下のセクションには、9 ページの『インストールのシナリオ』のセクションで説明されているインストールの各シナリオについての概要が示されています。各メイン・ステップにあるリンクにより、詳細な説明にアクセスできます。

CD からの WebSphere Development Studio Client のインストール: 作業の概要

このインストール・シナリオでは、インストール・ファイルが収容された CD があり、通常はご使用のワークステーションに WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries をインストールします。

CD からインストールする場合の一般的なステップを以下に示します。

1. 27 ページの『プリインストールの作業』にリストされているプリインストールのステップを実行します。
2. 最初のインストール CD を CD ドライブに挿入します。
3. システムで自動実行が使用可能に設定されている場合は、IBM Rational ソフトウェア開発プラットフォームのランチパッド・プログラムが自動的に開きます。自動実行が使用不可の場合は、ランチパッド・プログラムを開始してください。詳細は、37 ページの『ランチパッド・プログラムの開始』を参照してください。
4. ランチパッド・プログラムから WebSphere Development Studio Client のインストールを開始します。詳細は、38 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストールの開始』を参照してください。

使用しているワークステーションで IBM Installation Manager が検出されなかった場合は、それをインストールするよう要求され、インストール・ウィザードが開始します。このウィザードの画面上の指示に従って Installation Manager のインストールを完了します。詳細は、35 ページの『Windows への Installation Manager のインストール』を参照してください。

Installation Manager のインストールが完了するか、または Installation Manager がすでにコンピューターにインストールされている場合は、Installation Manager が起動して「パッケージのインストール」ウィザードが自動的に開始します。

5. 「パッケージのインストール」ウィザードの画面上の指示に従ってインストールを完了します。詳細は、39 ページの『IBM Installation Manager を使用した WebSphere Development Studio Client のインストール』、または 43 ページの『IBM Installation Manager を使用した WebSphere Development Studio Client の軽量オプションのインストール』を参照してください。
6. WebSphere Development Studio Client に付属のオプション・ソフトウェアをインストールします。WebSphere Development Studio Client. 詳細は、69 ページの『オプション・ソフトウェアのインストール』を参照してください。

ワークステーション上の電子イメージからの WebSphere Development Studio Client のインストール: 作業の概要

以下に、電子インストール・イメージから WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries をインストールする場合の準備の一般的なステップを示します。

注: IBM パスポート・アドバンテージでは、電子イメージの Zip ファイルをダウンロードできます。Entitled Software Support では、CD セットへの書き込みに適切な ISO ファイルをダウンロードできます。適切なユーティリティを使用して、ISO ファイルから電子イメージを抽出することもできます。

1. ダウンロード・ファイル、および抽出したインストール・イメージ・ファイルの格納に十分なスペースが、ご使用のワークステーションにあることを確認します。5 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
2. IBM パスポート・アドバンテージまたは Entitled Software Support から、製品イメージのすべての必要な部分を一時ディレクトリにダウンロードします。
3. Zip ファイルまたは ISO 抽出ユーティリティを使用して、ダウンロード・ファイルからインストール・イメージを抽出し、そのインストール・イメージが完全であるか検査します。詳細は、25 ページの『電子イメージの検査と抽出』を参照してください。
4. 以下の『電子イメージからのインストール』のステップを続行してください。

電子イメージからのインストール

以下に、電子インストール・イメージから WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries をインストールする場合の一般的なステップを示します。

1. 27 ページの『プリインストールの作業』にリストされているプリインストールのステップを実行します。
2. ランチパッド・プログラムを開始します。詳細は、37 ページの『ランチパッド・プログラムの開始』を参照してください。
3. ランチパッド・プログラムから WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries のインストールを開始します。詳細は、38 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストールの開始』を参照してください。

使用しているワークステーションで IBM Installation Manager が検出されなかった場合は、それをインストールするよう要求され、インストール・ウィザードが開始します。このウィザードの画面上の指示に従って Installation Manager のインストールを完了します。詳細は、35 ページの『Windows への Installation Manager のインストール』を参照してください。

Installation Manager のインストールが完了するか、または Installation Manager がすでにコンピューターにインストールされている場合は、Installation Manager が起動して「パッケージのインストール」ウィザードが自動的に開始します。

注: 製品のインストールを完了する前に Installation Manager を終了する場合は、ランチパッドから Installation Manager を再始動する必要があります。

Installation Manager を直接開始する場合、その Installation Manager は必要なインストール・リポジトリで事前構成されません。

4. 「パッケージのインストール」ウィザードの画面上の指示に従ってインストールを完了します。詳細は、39 ページの『IBM Installation Manager を使用した WebSphere Development Studio Client のインストール』、または 43 ページの『IBM Installation Manager を使用した WebSphere Development Studio Client の軽量オプションのインストール』を参照してください。
5. WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries に付属するオプション・ソフトウェアをインストールします。詳細は、69 ページの『オプション・ソフトウェアのインストール』を参照してください。

共用ドライブにある電子イメージからの WebSphere Development Studio Client のインストール: 作業の概要

このシナリオでは、共用ドライブに電子イメージを配置し、単一ロケーションから、WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries のインストール・ファイルへ企業内の各ユーザーがアクセスできるようにします。

以下のステップは、共用ドライブにインストール・イメージを配置する担当者が実行してください。

1. 共用ドライブに、IBM パスポート・アドバンテージからのダウンロード・ファイル、および抽出したインストール・イメージ・ファイルの両方の格納に十分なスペースがあることを確認します。詳細は、5 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
2. IBM パスポート・アドバンテージから、製品イメージのすべての必要なパートを共用ドライブの一時ディレクトリにダウンロードします。
3. ダウンロード・ファイルから共用ドライブのアクセス可能なディレクトリにインストール・イメージを抽出し、そのインストール・イメージが完全であるか検査します。詳細は、25 ページの『電子イメージの検査と抽出』を参照してください。

共用ドライブにあるインストール・ファイルから WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries をインストールするには、以下のようにします。

1. インストール・イメージが収められている共用ドライブの disk1 ディレクトリに移動します。
2. 30 ページの『電子イメージからのインストール』の各ステップに従ってください。

HTTP Web サーバー上のリポジトリからの WebSphere Development Studio Client のインストール: 作業の概要

このシナリオでは、製品パッケージは IBM Installation Manager により HTTP Web サーバーから取得されます。

以下のステップでは、WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries のパッケージを収容したリポジトリが HTTP Web サーバー上に作成されていると仮定しています。詳細は、『HTTP Web サーバーへの WebSphere Development Studio Client の配置: 作業の概要』を参照してください。

HTTP サーバー上のリポジトリから WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries パッケージをインストールするには、以下のようにします。

1. 27 ページの『プリインストールの作業』にリストされているプリインストールのステップを実行します。
2. IBM Installation Manager をインストールします。 35 ページの『IBM Installation Manager の管理』を参照してください。 このシナリオでは、例えば、Installation Manager のインストール・ファイルは共用ドライブから使用可能です。
3. Installation Manager を開始します。詳細は、35 ページの『Installation Manager の始動』を参照してください。
4. Installation Manager のリポジトリ設定として、WebSphere Development Studio Client のパッケージが収容されたリポジトリの URL を設定します。 20 ページの『Installation Manager でのリポジトリの設定』を参照してください。
5. Installation Manager で「パッケージのインストール」ウィザードを開始し、「パッケージのインストール」ウィザードに表示される指示に従ってインストールを実行します。詳細は、39 ページの『IBM Installation Manager を使用した WebSphere Development Studio Client のインストール』、または 43 ページの『IBM Installation Manager を使用した WebSphere Development Studio Client の軽量オプションのインストール』を参照してください。
6. WebSphere Development Studio Client に付属のオプション・ソフトウェアをインストールします。詳細は、69 ページの『オプション・ソフトウェアのインストール』を参照してください。

HTTP Web サーバーへの WebSphere Development Studio Client の配置: 作業の概要

HTTP Web サーバー上に配置されているリポジトリからのインストール用に WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries を準備するには、以下のようにします。

1. HTTP または HTTPS Web サーバーに、製品パッケージを保管するのに十分なディスク・スペースがあることを確認します。 5 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
2. ワークステーションに、IBM Passport Advantage からダウンロードする必要があるファイルと、抽出したインストール・イメージの両方を保管するのに十分なディスク・スペースがあることを確認します。 5 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
3. 必要な製品イメージのパーツをすべて IBM Passport Advantage からワークステーション上の一時ディレクトリにダウンロードします。

4. インストール・イメージを、ダウンロードしたファイルからワークステーション上の別の一時ディレクトリーに抽出し、そのインストール・イメージが完全であることを確認します。詳細は、25 ページの『電子イメージの検査と抽出』を参照してください。
5. Auxiliary CD (または電子ディスク) から、IBM Packaging Utility をワークステーションにインストールします。
6. その Packaging Utility を使用して、WebSphere Development Studio Client 製品パッケージをコピーします。このユーティリティーについての詳細は、57 ページの『IBM Packaging Utility』を参照してください。
7. Packaging Utility の出力を、HTTP または HTTPS Web サーバーにコピーします。
8. IBM Installation Manager のインストール・ファイルを、Auxiliary CD から共用ドライブにコピーします。
9. 組織内のユーザーに、Installation Manager のインストールを指示します。
10. ユーザーに、作成した WebSphere Development Studio Client 製品パッケージが含まれているリポジトリーの URL を提供します。

IBM Installation Manager の管理

Windows への Installation Manager のインストール

IBM Installation Manager は、ランチパッドによりインストールします。このプロセスについての詳細は、37 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストール』を参照してください。

手動で Installation Manager をインストールするには、以下のようにします。

1. 最初のインストール・ディスクにあるフォルダー `InstallerImage_win32` から `setup.exe` を実行します。
2. 「ウェルカム」画面で、「次へ」をクリックします。
3. 「ご使用条件」ページに表示されるご使用条件を検討し、「ご使用条件に同意する (I accept the terms in the license agreement)」を選択して同意します。「次へ」をクリックします。
4. 必要に応じて「宛先フォルダー」ページの「変更」ボタンをクリックし、インストール・ロケーションを変更します。「次へ」をクリックします。
5. 「セットアップ・タイプ (Setup Type)」ページで、「次へ」をクリックします。
6. 「プログラムのインストールの準備完了 (Ready to Install Program)」ページで、「インストール」をクリックします。インストールが終了すると、「完了」ページが開きます。
7. 「終了」をクリックします。

Installation Manager の始動

IBM Installation Manager は、ランチパッド・プログラムから始動する必要があります。それにより、リポジトリ設定が構成され、WebSphere Development Studio Client パッケージが選択されて、Installation Manager が始動します。直接 Installation Manager を始動する場合は、手動でリポジトリ設定を設定し、製品パッケージを選択する必要があります。

手動で Installation Manager を始動するには、以下のようにします。

1. 「タスクバー」から「スタート」メニューを開きます。
2. 「すべてのプログラム」>「IBM Installation Manager」>「IBM Installation Manager」と選択します。

Installation Manager のアンインストール

手動で Installation Manager をアンインストールするには、以下のようにします。

1. 最初のインストール・ディスクにある `InstallerImager_win32` フォルダーから `setup.exe` を実行します。
2. 「ウェルカム」画面で、「次へ」をクリックします。

3. 「プログラムの保守」ページで、「**削除**」を選択します。「**次へ**」をクリックします。
4. 「セットアップ・タイプ (Setup Type)」ページで、「**次へ**」をクリックします。
5. 「プログラムの削除」ページで「**削除**」をクリックします。
6. InstallShield の「ウィザード完了」ページで「**終了**」をクリックします。

注: Installation Manager は、コントロール パネルを使用してアンインストールすることもできます (コントロール パネルを表示するには、「**スタート**」 → 「**設定**」 → 「**コントロール パネル**」 をクリックし、「**プログラムの追加と削除**」をダブルクリックします)。IBM Installation Manager のエントリーを選択し、「**除去**」をクリックします。

Installation Manager のサイレント・インストールおよびサイレント・アンインストール

IBM Installation Manager をサイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールすることができます。

Installation Manager のサイレント・インストール

Installation Manager をデフォルトのインストール・ロケーションにサイレント・インストールするには、以下を実行します。

1. 最初のインストール・ディスクの InstallerImage_win32 フォルダーにディレクトリーを変更します。
2. `setup.exe /S /v"/qn"` を実行します。

インストール・ロケーションを変更するには、`/v` オプションに `INSTALLDIR` プロパティーを追加します。たとえば、`setup.exe /S /v"/qn
INSTALLDIR=¥"C:¥InstallationManager¥"` とします。

Installation Manager のサイレント・アンインストール

Installation Manager をサイレント・アンインストールするには、以下を実行します。

コマンド・プロンプトで `msiexec /x {DBD90D51-BD46-41AF-A1F5-B74CEA24365B}` コマンドを実行します。

ランチパッド・プログラムからのインストール

ランチパッド・プログラムは、リリース情報の表示およびインストール・プロセスの開始を行うことのできる、単一のロケーションです。

以下のような場合、ランチパッド・プログラムを使用して WebSphere Development Studio Client のインストールを開始します。

- 製品 CD からのインストール。
- ワークステーション上の電子イメージからのインストール。
- 共用ドライブにある電子イメージからのインストール。

ランチパッド・プログラムからインストール・プロセスを開始すると、IBM Installation Manager は、WebSphere Development Studio Client パッケージを含みリポジトリのロケーションで事前構成されて開始します。Installation Manager を直接インストールして開始する場合は、リポジトリの設定を手動で設定しておく必要があります。

ランチパッドからインストールするには、以下を実行します。

1. 27 ページの『プリインストールの作業』の説明に従ってプリインストールの作業を完了します。
2. ランチパッド・プログラムを開始します。『ランチパッド・プログラムの開始』を参照してください。
3. WebSphere Development Studio Client のインストールを開始します。38 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストールの開始』を参照してください。

「パッケージのインストール」ウィザードの画面上の指示に従ってインストールを完了します。詳細については、39 ページの『WebSphere Development Studio Client のインストール』を参照してください。

ランチパッド・プログラムの開始

27 ページの『プリインストールの作業』の説明に従ってプリインストールの作業を完了します。

インストールを CD から行う場合で、ワークステーションで自動実行が使用可能に設定されているときは、CD ドライブに最初のインストール・ディスクを挿入すると、WebSphere Development Studio Client ランチパッドが自動的に開始します。電子イメージからインストールする場合や、ワークステーションで自動実行が構成されていない場合は、手動でランチパッド・プログラムを開始する必要があります。

ランチパッド・プログラムを開始するには、以下の手順を実行します。

1. IBM WebSphere Development Studio Client CD を CD ドライブに挿入します。
2. システムで自動実行が使用可能に設定されている場合は、IBM WebSphere Development Studio Client ランチパッド・プログラムが自動的に開きます。

3. ランチパッドを手動で開始するには、以下を実行します。
 - 電子イメージからインストールする場合は、その電子イメージが解凍されている disk1 フォルダ内の launchpad.exe をダブルクリックします。
 - CD からインストールする場合は、最初の製品 CD の launchpad.exe をダブルクリックします。

ランチパッド・プログラムからのインストールの開始

1. ランチパッド・プログラムを開始します。
2. まだランチパッドを開始していない場合は、「リリース情報」をクリックしてリリース情報を読みます。
3. すでにインストールを開始している場合は、「**IBM WebSphere Development Studio Client for iSeries のインストール (Install IBM WebSphere Development Studio Client for iSeries)**」または「**IBM WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries のインストール (Install IBM WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries)**」をクリックします。
4. メッセージ・ウィンドウが開き、プログラム IBM Installation Manager がワークステーションで検出されたかどうか通知されます。
 - IBM Installation Manager がシステムで検出されなかった場合は、それをインストールしてから続行するよう指示されます。
 - a. 「**OK**」をクリックして IBM Installation Manager をインストールします。IBM Installation Manager インストール・ウィザードが開始します。
 - b. このウィザードの画面上の指示に従って IBM Installation Manager のインストールを完了します。詳細は、35 ページの『Windows への Installation Manager のインストール』を参照してください。
 - c. IBM Installation Manager のインストールが正常に完了したら、「終了」をクリックしてウィザードを閉じます。
 - d. 表示されたメッセージを読み、「**OK**」をクリックします。Installation Manager が開始し、「パッケージのインストール」ウィザードが自動的に開きます。
 - IBM Installation Manager がシステムで検出された場合は、「**OK**」をクリックすると Installation Manager が開始し、「パッケージのインストール」ウィザードが自動的に開きます。
5. 「パッケージのインストール」ウィザードの画面上の指示に従ってインストールを完了します。詳細については、39 ページの『WebSphere Development Studio Client のインストール』を参照してください。

WebSphere Development Studio Client のインストール

このセクションでは、IBM Installation Manager のグラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用した、IBM WebSphere Development Studio Client for iSeries または IBM WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries のインストールについて説明します。

WebSphere Development Studio Client の軽量インストール・オプションでは、ネイティブの i5/OS アプリケーションを開発するための、基本的な編集/コンパイル/デバッグ環境が提供されます。このインストール・オプションは、WebSphere Development Studio Client for iSeries および WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries の両方に対して適用可能であり、実行時に大量のリソースを必要としません。このステップの概要について、完全なオプションをインストールする場合は、『IBM Installation Manager を使用した WebSphere Development Studio Client のインストール』を参照し、iSeries の基本ツールのみをインストールする場合は 43 ページの『IBM Installation Manager を使用した WebSphere Development Studio Client の軽量オプションのインストール』を参照してください。

IBM Installation Manager を使用した WebSphere Development Studio Client のインストール

以下のステップでは、Installation Manager GUI を使用した、WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries パッケージのインストールについて説明しています。

使用するインストール・シナリオによっては、Installation Manager の「パッケージのインストール」ウィザードが自動的に開始する場合があります。(例えば CD からインストールする場合など)。それ以外のシナリオでは、ウィザードを開始する必要があります。

1. Installation Manager の「パッケージのインストール」ウィザードが自動的に開始されない場合は、次のステップを実行します。
 - a. Installation Manager を開始します。
 - b. 「開始」ページで「パッケージのインストール」をクリックします。

注: Installation Manager の新規バージョンが検出された場合は、インストールを続行する前に、新規バージョンをインストールすることを確認するプロンプトが出されます。「OK」をクリックして、先へ進みます。
Installation Manager は、新規バージョンのインストール、停止、再始動、および再開を自動的に行います。

Installation Manager が開始されると、定義済みのリポジトリ内で、使用可能なパッケージが検索されます。

2. 「パッケージのインストール」ウィザードの「インストール」ページに、Installation Manager での検索対象リポジトリで検出されたすべてのパッケー

ジがリストされます。あるパッケージの 2 つのバージョンが検出された場合は、そのパッケージの最新または推奨のバージョンのみが表示されます。

- Installation Manager で検出されたパッケージのすべてのバージョンを表示するには、「**すべてのバージョンを表示**」をクリックしてください。
 - 推奨パッケージのみの表示に戻るには、「**推奨のみを表示**」をクリックしてください。
3. WebSphere Development Studio Client パッケージをクリックすると、その説明が「**詳細**」ペインに表示されます。
 4. WebSphere Development Studio Client パッケージに対する更新を検索するには、「**更新の確認**」をクリックします。

注: Installation Manager で、インストール済みパッケージの事前定義済み IBM 更新リポジトリ・ロケーションが検索されるようにするには、「リポジトリ」設定ページで「**インストールと更新を行っている間にリンクされたりリポジトリをサーチします**」を選択する必要があります。この設定はデフォルトで選択されています。インターネットへのアクセスも必要になります。

Installation Manager により、その製品パッケージ用に事前定義された IBM 更新リポジトリで更新が検索されます。また、設定したリポジトリ・ロケーションも検索されます。プログレス・バーに、検索中であることが示されます。基本の製品パッケージのインストールと同時に、更新もインストールできます。

5. WebSphere Development Studio Client パッケージ用の更新が検出された場合は、「パッケージのインストール」ページにある「**インストール・パッケージ**」リスト内の対応製品の下に、その更新が表示されます。デフォルトでは、推奨の更新のみが表示されます。
 - 選択可能なパッケージ用に検出されたすべての更新を表示するには、「**すべてのバージョンを表示**」をクリックします。
 - パッケージの説明を「**詳細**」に表示するには、そのパッケージ名をクリックします。README ファイル、リリース情報など、パッケージに関する追加情報が使用可能な場合は、説明文の最後に「**詳細情報**」リンクが表示されます。このリンクをクリックすると、ブラウザに追加情報が表示されます。インストールするパッケージについて完全に理解するには、事前にすべての情報をよくお読みください。
6. インストールする WebSphere Development Studio Client パッケージおよびそのパッケージ用の任意の更新を選択します。依存関係のある更新は自動的に、相互に選択およびクリアされます。「**次へ**」をクリックして先に進みます。

注: 同時に複数のパッケージをインストールする場合は、すべてのパッケージが同一のパッケージ・グループにインストールされます。

7. 「ご使用条件」ページで、選択されたパッケージのご使用条件を参照します。複数のパッケージのインストールを選択した場合は、各パッケージごとにご使用条件があります。「**ご使用条件**」ページの左側で、ご使用条件を表示する各パッケージのバージョンをクリックします。インストールを選択したパッケージのバージョン (例えば、基本パッケージと更新など) が、パッケージ名の下にリストされます。

- a. すべてのご使用条件に同意する場合は、「**ご使用条件に同意する (I accept the terms of the license agreements)**」をクリックします。
 - b. 「**次へ**」をクリックして先に進みます。
8. 「ロケーション」ページで、**共用リソース・ディレクトリー** のパスを「**共用リソース・ディレクトリー**」フィールドに入力するか、またはデフォルトのパスを受け入れます。共用リソース・ディレクトリーには、1 つ以上のパッケージ・グループで共用されるリソースが収容されます。「**次へ**」をクリックして先に進みます。

デフォルトのパスは、C:\Program Files\IBM\SDP70Shared です。

重要: 共用リソース・ディレクトリーは、最初にパッケージをインストールするときのみ指定できます。将来のパッケージの共用リソース用に十分なスペースが確保できるよう、最大容量のディスクを使用してください。すべてのパッケージをアンインストールしない限り、このディレクトリー・ロケーションは変更できません。

9. 「ロケーション」ページで、**WebSphere Development Studio Client** パッケージのインストール先として既存のパッケージ・グループを選択するか、または新規のグループを作成します。パッケージ・グループは、同一グループ内の各パッケージ間でリソースを共用するためのディレクトリーを示します。新規パッケージ・グループの作成するには、以下のようになります。
- a. 「**新規パッケージ・グループの作成**」をクリックします。
- b. そのパッケージ・グループ用のインストール・ディレクトリーのパスを入力します。パッケージ・グループの名前は自動的に作成されます。

デフォルトのパスは、C:\Program Files\IBM\SDP70 です。

- c. 「**次へ**」をクリックして先に進みます。

重要: WebSphere Development Studio Client の軽量オプションのインストール用には、別のパッケージ・グループがインストールされていないインストール・ロケーションを選択してください。 WebSphere Development Studio Client の完全パッケージと WebSphere Development Studio Client の軽量オプションを同一のインストール・ロケーションに配置すると、結果としてリソースが共有されます。このため、WebSphere Development Studio Client の軽量オプションでも iSeries の最小セットより多いツールを保持することになります。

10. 次の「ロケーション」ページにおいて、システムにインストール済みの既存の Eclipse IDE の拡張を選択することができ、拡張により、インストール中のパッケージにその機能が追加されます。このオプションを選択するには、Eclipse バージョン 3.2.1 以降である必要があります。
- 既存の Eclipse IDE を拡張しない場合は、「**次へ**」をクリックして先に進みます。
- 既存の Eclipse IDE を拡張する場合は、以下のようになります。
- a. 「**既存の Eclipse の拡張**」を選択します。
- b. 「**Eclipse IDE**」フィールドで、eclipse の実行可能ファイル (eclipse.exe または eclipse.bin) が収められているフォルダーのロケーションを入力するか、そこにナビゲートします。Installation Manager により、Eclipse

IDE のバージョンがインストール中のパッケージに対して有効であるか検査されます。「**Eclipse IDE JVM**」フィールドには、指定した IDE 用の Java 仮想マシン (JVM) が表示されます。

c. 「次へ」をクリックして先に進みます。

重要: インストールされている Eclipse IDE を拡張することにより、WebSphere Development Studio Client for iSeries および WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries の一部のコンポーネントがサポートされます。

11. 「フィーチャー」ページの「言語」で、パッケージ・グループの言語を選択します。IBM WebSphere Development Studio Client パッケージのユーザー・インターフェースおよび文書用の、対応する各国語の翻訳がインストールされます。この選択は、このパッケージ・グループでインストールされるすべてのパッケージに適用されることに注意してください。
12. 次の「フィーチャー」ページで、インストールするパッケージ・フィーチャーを選択します。フィーチャーについての詳細は、11 ページの『フィーチャー』を参照してください。
 - a. オプション: 各フィーチャー間の依存関係を参照するには、「**依存関係の表示**」を選択します。
 - b. オプション: フィーチャーをクリックすると、その簡単な説明が「**詳細**」に表示されます。
 - c. パッケージ内のフィーチャーを選択またはクリアします。Installation Manager により、別のフィーチャーとの依存関係が自動的に適用され、そのインストールに対する更新されたダウンロード・サイズおよびディスク・スペースの要件が表示されます。
 - d. フィーチャーの選択が完了したら、「次へ」をクリックして続行します。
13. IBM WebSphere Development Studio Client パッケージをインストールする前に、「要約」ページで選択項目を検討します。前のページで選択した選択項目を変更する場合は、「戻る」をクリックして変更します。インストールの選択項目を確認したら、「インストール」をクリックしてパッケージをインストールします。プログレス・バーに、インストールの完了パーセントが表示されます。
14. インストール処理が完了すると、処理の成功を確認するメッセージが表示されます。
 - a. 新規ウィンドウに現行セッションのインストール・ログ・ファイルを開くには、「**ログ・ファイルの表示**」をクリックします。続行する場合は「インストール・ログ」ウィンドウを閉じる必要があります。
 - b. 「インストール済みパッケージ」ウィザードで、終了時に IBM WebSphere Development Studio Client を開始するかどうか選択します。
 - c. 「終了」をクリックし、選択されたパッケージを起動します。「インストール済みパッケージ」ウィザードが閉じ、Installation Manager の「開始」ページに戻ります。

IBM Installation Manager を使用した WebSphere Development Studio Client の軽量オプションのインストール

以下のステップでは、Installation Manager GUI を使用した、WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries パッケージの軽量の編集/コンパイル/デバッグ環境のインストールについて説明しています。

使用するインストール・シナリオによっては、Installation Manager の「パッケージのインストール」ウィザードが自動的に開始する場合があります。(例えば CD からインストールする場合など)。それ以外のシナリオでは、ウィザードを開始する必要があります。

1. Installation Manager の「パッケージのインストール」ウィザードが自動的に開始されない場合は、次のステップを実行します。
 - a. Installation Manager を開始します。
 - b. 「開始」ページで「パッケージのインストール」をクリックします。

注: Installation Manager の新規バージョンが検出された場合は、インストールを続行する前に、新規バージョンをインストールすることを確認するプロンプトが出されます。「OK」をクリックして、先へ進みます。
Installation Manager は、新規バージョンのインストール、停止、再始動、および再開を自動的に行います。

Installation Manager が開始されると、定義済みのリポジトリ内で、使用可能なパッケージが検索されます。

2. 「パッケージのインストール」ウィザードの「インストール」ページに、Installation Manager での検索対象リポジトリで検出されたすべてのパッケージがリストされます。あるパッケージの 2 つのバージョンが検出された場合は、そのパッケージの最新または推奨のバージョンのみが表示されます。
 - Installation Manager で検出されたパッケージのすべてのバージョンを表示するには、「すべてのバージョンを表示」をクリックしてください。
 - 推奨パッケージのみの表示に戻るには、「推奨のみを表示」をクリックしてください。
3. WebSphere Development Studio Client パッケージをクリックすると、その説明が「詳細」ペインに表示されます。
4. WebSphere Development Studio Client パッケージに対する更新を検索するには、「更新の確認」をクリックします。

注: Installation Manager で、インストール済みパッケージの事前定義済み IBM 更新リポジトリ・ロケーションが検索されるようにするには、「リポジトリ」設定ページで「インストールと更新を行っている間にリンクされたリポジトリをサーチします」を選択する必要があります。この設定はデフォルトで選択されています。インターネットへのアクセスも必要になります。

Installation Manager により、その製品パッケージ用に事前定義された Web サイトで更新が検索されます。また、設定したリポジトリ・ロケーションも検

索されます。プログレス・バーに、検索中であることが示されます。基本の製品パッケージのインストールと同時に、更新もインストールできます。

5. WebSphere Development Studio Client パッケージ用の更新が検出された場合は、「パッケージのインストール」ページにある「**インストール・パッケージ**」リスト内の対応製品の下に、その更新が表示されます。デフォルトでは、推奨の更新のみが表示されます。
 - 選択可能なパッケージ用に検出されたすべての更新を表示するには、「**すべてのバージョンを表示**」をクリックします。
 - パッケージの説明を「**詳細**」に表示するには、そのパッケージ名をクリックします。README ファイル、リリース情報など、パッケージに関する追加情報が使用可能な場合は、説明文の最後に「**詳細情報**」リンクが表示されます。このリンクをクリックすると、ブラウザに追加情報が表示されます。インストールするパッケージについて完全に理解するには、事前にすべての情報をよくお読みください。
6. インストールする WebSphere Development Studio Client パッケージおよびそのパッケージ用の任意の更新を選択します。依存関係のある更新は自動的に、相互に選択およびクリアされます。「**次へ**」をクリックして先に進みます。

注: 同時に複数のパッケージをインストールする場合は、すべてのパッケージが同一のパッケージ・グループにインストールされます。

7. 「ご使用条件」ページで、選択されたパッケージのご使用条件を参照します。複数のパッケージのインストールを選択した場合は、各パッケージごとにご使用条件があります。「**ご使用条件**」ページの左側で、ご使用条件を表示する各パッケージのバージョンをクリックします。インストールを選択したパッケージのバージョン (例えば、基本パッケージと更新など) が、パッケージ名の下にリストされます。
 - a. すべてのご使用条件に同意する場合は、「**ご使用条件に同意する (I accept the terms of the license agreements)**」をクリックします。
 - b. 「**次へ**」をクリックして先に進みます。
8. 「ロケーション」ページで、共用リソース・ディレクトリー のパスを「**共用リソース・ディレクトリー**」フィールドに入力するか、またはデフォルトのパスを受け入れます。共用リソース・ディレクトリーには、1 つ以上のパッケージ・グループで共用されるリソースが収容されます。「**次へ**」をクリックして先に進みます。

デフォルトのパスは、C:\Program Files\IBM\SDP70Shared です。

重要: 共用リソース・ディレクトリーは、最初にパッケージをインストールするときのみ指定できます。将来のパッケージの共用リソース用に十分なスペースが確保できるよう、最大容量のディスクを使用してください。すべてのパッケージをアンインストールしない限り、このディレクトリー・ロケーションは変更できません。

9. 「ロケーション」ページで、新規のパッケージ・グループ を作成するよう選択し、WebSphere Development Studio Client の軽量オプションをインストールします。パッケージ・グループは、同一グループ内の各パッケージ間でリソースを共用するためのディレクトリーを示します。新規パッケージ・グループの作成するには、以下のようにします。

- a. 「**新規パッケージ・グループの作成**」をクリックします。
- b. そのパッケージ・グループ用のインストール・ディレクトリーのパスを入力します。 パッケージ・グループの名前は自動的に作成されます。

重要: WebSphere Development Studio Client の軽量オプションのインストール用には、別のパッケージ・グループがインストールされていないインストール・ロケーションを選択してください。 WebSphere Development Studio Client の完全パッケージと WebSphere Development Studio Client の軽量オプションを同一のインストール・ロケーションに配置すると、結果としてリソースが共有されます。このため、WebSphere Development Studio Client の軽量オプションでも iSeries の最小セットより多いツールを保持することになります。

- c. 「**次へ**」をクリックして先に進みます。
10. 次の「ロケーション」ページにおいて、システムにインストール済みの既存の Eclipse IDE の拡張を選択することができ、拡張により、インストール中のパッケージにその機能が追加されます。このオプションを選択するには、Eclipse バージョン 3.2.1 以降である必要があります。
- 既存の Eclipse IDE を拡張しない場合は、「**次へ**」をクリックして先に進みます。
 - 既存の Eclipse IDE を拡張する場合は、以下のようにします。
 - a. 「**既存の Eclipse の拡張**」を選択します。
 - b. 「**Eclipse IDE**」フィールドで、eclipse の実行可能ファイル (eclipse.exe または eclipse.bin) が収められているフォルダーのロケーションを入力するか、そこにナビゲートします。 Installation Manager により、Eclipse IDE のバージョンがインストール中のパッケージに対して有効であるか検査されます。「**Eclipse IDE JVM**」フィールドには、指定した IDE 用の Java 仮想マシン (JVM) が表示されます。
 - c. 「**次へ**」をクリックして先に進みます。

重要: インストールされている Eclipse IDE を拡張することにより、WebSphere Development Studio Client for iSeries および WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries の一部のコンポーネントがサポートされます。

11. 「フィーチャー」ページの「言語」で、パッケージ・グループの言語を選択します。 WebSphere Development Studio Client パッケージのユーザー・インターフェースおよび資料用の、対応する各国語の翻訳がインストールされます。この選択は、このパッケージ・グループでインストールされるすべてのパッケージに適用されることに注意してください。
12. 次の「フィーチャー」ページで、デフォルトで選択されたすべてのパッケージ・フィーチャーを選択解除します (**i5/OS 開発ツール・リモート・システム・エクスプローラー**および **iSeries プロジェクト**のフィーチャーは除きます)。「**次へ**」をクリックして先に進みます。

重要: WebSphere Development Studio Client の軽量オプションをインストールする場合は、**i5/OS 開発ツール・リモート・システム・エクスプローラ**

ーおよび iSeries プロジェクトのフィーチャーのみを選択する必要があります。それ以外のすべてのフィーチャーはチェックを外す必要があります。

13. 次の「フィーチャー」ページで、「次へ」をクリックします。
14. WebSphere Development Studio Client パッケージをインストールする前に、「要約」ページで選択項目を検討します。前のページで選択した選択項目を変更する場合は、「戻る」をクリックして変更します。インストールの選択項目を確認したら、「インストール」をクリックしてパッケージをインストールします。プログレス・バーに、インストールの完了パーセントが表示されます。
15. インストール処理が完了すると、処理の成功を確認するメッセージが表示されます。
 - a. 新規ウィンドウに現行セッションのインストール・ログ・ファイルを開くには、「ログ・ファイルの表示」をクリックします。続行する場合は「インストール・ログ」ウィンドウを閉じる必要があります。
 - b. 「インストール済みパッケージ」ウィザードで、終了時に WebSphere Development Studio Client を開始するかどうか選択します。
 - c. 「終了」をクリックし、選択されたパッケージを起動します。「インストール済みパッケージ」ウィザードが閉じ、Installation Manager の「開始」ページに戻ります。

サイレント・インストール

Installation Manager をサイレント・インストール・モードで実行し、WebSphere Development Studio Client の製品パッケージをインストールできます。サイレント・モードでインストールを行う場合はユーザー・インターフェースが使用できません。代わりに、Installation Manager では応答ファイルを使用し、製品パッケージのインストールに必要なコマンドを入力します。

Installation Manager をサイレント・モードで実行することにより、スクリプトによる製品パッケージのインストール、更新、変更、およびアンインストールのバッチ処理を使用できるため、省力化に役立ちます。

WebSphere Development Studio Client パッケージをサイレントにインストールするには、その前に Installation Manager をインストールしておく必要があることに注意してください。Installation Manager のインストールについての詳細は、35 ページの『IBM Installation Manager の管理』を参照してください。

サイレント・インストールを実行するには、2 つのメインタスクが必要となります。

1. 応答ファイルの作成
2. サイレント・インストール・モードでの Installation Manager の実行

応答ファイルの作成

Installation Manager を使用して WebSphere Development Studio Client 製品パッケージをインストールする際に行ったアクションを記録することで、応答ファイルを作成することができます。応答ファイルを記録すると、Installation Manager GUI で行ったすべての選択が応答ファイルに保管されます。Installation Manager をサイレント・モードで実行した場合、Installation Manager は応答ファイルを使用して、パッケージが含まれているリポジトリの位置指定や、インストールするフィーチャーの選択などを行います。インストール手順については、39 ページの『IBM Installation Manager を使用した WebSphere Development Studio Client のインストール』を参照してください。

サンプルの応答ファイルは、ここにあります。

インストール (またはアンインストール) の応答ファイルを記録するには、以下のようになります。

1. コマンド行で、Installation Manager をインストールしたディレクトリー内の eclipse サブディレクトリーに移動します。例えば、以下のようになります。
 - `cd C:\Program Files\IBM\Installation Manager\eclipse`
2. コマンド行で以下のコマンドを入力して Installation Manager を始動し、独自の応答ファイルおよびログ・ファイル (オプション) のファイル名およびロケーションを代入します。

- `launcher.bat -record <response file path and name>.xml -log <log file path and name>.xml`.

例えば、`launcher.bat -record c:\mylog\responsefile.xml -log c:\mylog\record_log.xml`

注: 入力したファイル・パスがすでに存在することを確認してください。

Installation Manager は、応答ファイルおよびログ・ファイル用にディレクトリーを作成しません。

3. 「パッケージのインストール」ウィザードに表示される指示に従って、インストールに必要な選択を行い、「要約」ページに到達したら停止します。詳細は、39 ページの『IBM Installation Manager を使用した WebSphere Development Studio Client のインストール』を参照してください。
4. 「インストール」をクリックし、インストール・プロセスが開始したら「キャンセル」をクリックします。
5. 「終了」をクリックして、Installation Manager を閉じます。

XML 応答ファイルが作成され、コマンドで指定された場所に常駐します。

サイレント・インストール・モードでの Installation Manager の実行

Installation Manager をコマンド行からサイレント・インストール・モードで実行することができます。

ここには、Installation Manager を実行するための応答ファイルのサンプルがあります。Installation Manager をサイレント・モードで実行する方法に関する追加文書については、Installation Manager のオンライン・ヘルプを参照してください。(例えば、認証 (ユーザー ID およびパスワード) が必要なりポジトリリーからのサイレント・インストールなど。)

Installation Manager をサイレント・モードで実行するには、Installation Manager の開始コマンド `launcher.bat` に `-silent` 引数を付加します。`launcher.bat` ファイルは、Installation Manager のインストール・ディレクトリーの `eclipse` フォルダにあります。

- `launcher.bat -silent [arguments]`

以下の表に、サイレント・インストール・コマンドで使用される引数の説明を示します。

引数	説明
<code>-silent</code>	(Installation Manager のユーザー・インターフェースを使用せずに) サイレント・モードで実行するよう Installation Manager に指示します。
<code>-input</code>	Installation Manager への入力として XML 応答ファイルを指定します。応答ファイルには、Installation Manager によって実行されるコマンドが含まれます。

引数	説明
-log	(オプション) サイレント・インストールの結果を記録するログ・ファイルを指定します。ログ・ファイルは XML ファイルです。

Installation Manager をサイレント・モードで実行するには、以下を実行します。

1. コマンド行で、Installation Manager をインストールしたディレクトリー内の eclipse サブディレクトリーに移動します。たとえば、以下のようになります。
 - `cd C:\Program Files\IBM\Installation Manager\eclipse`
2. 以下のコマンドを入力して実行します。応答ファイルのロケーション、およびオプションでログ・ファイルのロケーションは、ご使用のロケーションに置換して指定してください。

```
launcher.bat -silent -input c:/temp/responsefile.xml -log c:/temp/mylog.log
```

Installation Manager がサイレント・インストール・モードで実行します。Installation Manager は応答ファイルを読み込んで、指定したディレクトリーにログ・ファイルを書き込みます。サイレント・インストール・モードで実行する場合は応答ファイルは必須ですが、ログ・ファイルはオプションです。この実行結果のステータスは、正常終了時は 0、失敗時は 0 以外となります。

使用可能なすべての製品の検索とサイレント・インストール

使用可能なすべての製品の更新をサイレントに検索し、インストールすることができます。

使用可能なすべての製品を検索し、サイレント・インストールを実行するには、次の操作を実行します。

1. コマンド行で、Installation Manager をインストールしたディレクトリー内の eclipse サブディレクトリーに移動します。
2. 以下のコマンドを入力して実行します。応答ファイルのロケーション、およびオプションでログ・ファイルのロケーションは、ご使用のロケーションに置換して指定してください。
 - Windows の場合: `launcher.bat -silent -installAll`

Installation Manager によって検出された、利用可能なすべての製品がインストールされます。

現在インストール済みのすべての製品の更新のサイレント・インストール

現在インストール済みのすべての製品の更新をサイレントに検索し、インストールすることができます。

使用可能なすべての製品の更新を検索し、サイレント・インストールを実行するには、次の操作を実行します。

1. コマンド行で、Installation Manager をインストールしたディレクトリー内の eclipse サブディレクトリーに移動します。

2. 以下のコマンドを入力して実行します。応答ファイルのロケーション、およびオプションでログ・ファイルのロケーションは、ご使用のロケーションに置換して指定してください。
 - Windows の場合: `launcher.bat -silent -updateAll`

Installation Manager によって検出された、利用可能なすべての製品の更新がインストールされます。

応答ファイルのコマンド

Installation Manager のサイレント・インストール機能を使用する場合は、Installation Manager で実行するコマンドを収容した応答ファイルを作成する必要があります。これを実行する方法としては、IBM WebSphere Development Studio Client for iSeries または IBM WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries パッケージを実際にインストールする際のアクションを記録する方法をお勧めします。ただし、応答ファイルを手動で作成または編集することもできます。

応答ファイルには、以下の 2 つのカテゴリのコマンドがあります。

- **設定コマンド** は、リポジトリ・ロケーションの情報など、Installation Manager の「ファイル」>「設定」下のグラフィカル・ユーザー・インターフェースにある設定を指定する場合に使用します。
- **サイレント・インストール・コマンド**は、Installation Manager の「パッケージのインストール」ウィザードをエミュレートする場合に使用します。

サイレント・インストール設定コマンド

設定は通常「設定」ウィンドウを使用して指定しますが、サイレント・インストール中に使用される応答ファイルで設定（キーとして認識されます）を指定することもできます。

注: 応答ファイルでは、複数の設定を指定することができます。

応答ファイルで設定を定義する場合、XML コードは以下の例のようになります。

```
<preference>
  name = "the key of the preference"
  value = "the value of the preference to be set"
</preference>
```

以下の表を使用して、サイレント・インストール設定のキーおよびそのキーに関連する値を確認してください。

キー	値	メモ
com.ibm.cic.common.core.preferences.logLocation	Installation Manager ログ・ファイルのロケーションを指定します。	重要: このキーはオプションであり、テストおよびデバッグ用に設計されています。ログ・ファイルのロケーションを指定しない場合、サイレント・インストールと Installation Manager の GUI パージョンの両方に、同じロケーションが使用されます。
com.ibm.cic.license.policy.location	リモート・ライセンス・ポリシー・ファイルが常駐する場所を定義する URL を指定します。	
com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyEnabled	True または False	False がデフォルト値です。
com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyHost	ホスト名または IP アドレス	
com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyPort	ポート番号	
com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyUseSocks	True または False	False がデフォルト値です。
com.ibm.cic.common.core.preferences.SOCKS.proxyHost	ホスト名または IP アドレス	
com.ibm.cic.common.core.preferences.SOCKS.proxyPort	ポート番号	
com.ibm.cic.common.core.preferences.ftp.proxyEnabled	True または False	False がデフォルト値です。
com.ibm.cic.common.core.preferences.ftp.proxyHost	ホスト名または IP アドレス	
com.ibm.cic.common.core.preferences.ftp.proxyPort	ポート番号	
com.ibm.cic.common.core.preferences.eclipseCache	共通コンポーネント・ディレクトリー	

サイレント・インストール・コマンド

以下の参照表に、サイレント・インストール時に使用可能な応答ファイル・コマンドの詳細を示しています。

応答ファイルのコマンド	説明
<p>Profile</p> <pre> <profile id="the profile (package group) id" installLocation="the install location of the profile"> <data key="key1" value="value1"/> <data key="key2" value="value2"/> </profile> </pre>	<p>このコマンドは、パッケージ・グループ (またはインストール・ロケーション) の作成に使用します。指定したパッケージ・グループが既に存在する場合、このコマンドは無効です。現在は、プロファイルの作成時に、サイレント・インストールにより 2 つのインストール・コンテキスト (Eclipse および native) も作成されます。プロファイルとは、インストール・ロケーションです。</p> <p>プロファイルのプロパティを設定するには、<data> 要素を使用します。</p> <p>現在サポートされているキーとそれに関連する値を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • eclipseLocation キーには、c:\myeclipse\%eclipse などの既存の Eclipse ロケーション値を指定します。 • cic.selector.nl キーには、zh、ja、en など、自然言語 (NL) ロケールの選択内容を指定します。 <p>注: 複数の NL 値を指定する場合は、コンマで区切ってください。</p> <p>現在サポートされている言語コードを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 英語 (en) • フランス語 (fr) • イタリア語 (it) • 中国語 (簡体字) (zh) • ロシア語 (ru) • 中国語 (繁体字) (台湾) (zh_TW) • 中国語 (繁体字) (香港) (zh_HK) • ドイツ語 (de) • 日本語 (ja) • ポーランド語 (pl) • スペイン語 (es) • チェコ語 (cs) • ハンガリー語 (hu) • 韓国語 (ko) • ポルトガル語 (pt_BR)

応答ファイルのコマンド	説明
Repository <pre> <server> <repository location="http://example/ repository/"> <repository location="file:/C:/ repository/"> <!--add more repositories below--> <...> </server> </pre>	<p>このコマンドは、サイレント・インストール時に使用されるリポジトリの指定に使用します。リモート・リポジトリの指定には、URL または UNC パスを使用します。ローカル・リポジトリの指定には、ディレクトリを使用します。</p>
Install <pre> <install> <offering profile= "profile id" features= "feature ids" id= "offering id" version= "offering version"></offering> <!--add more offerings below> <...> </install> </pre>	<p>このコマンドは、インストールするインストール・パッケージの指定に使用します。</p> <p>プロファイル ID は、既存のプロファイル、またはプロファイル設定コマンド (profile) で作成されたプロファイルと一致する必要があります。</p> <p>フィーチャー ID はオプションであり、「feature1, feature2」など、コンマで区切られたリストで指定します。フィーチャー ID が指定されない場合は、指定されたオフリングのすべてのデフォルト・フィーチャーがインストールされます。</p> <p>注: 必須のフィーチャーは、コンマ区切りのリストで明示的に指定されなくても、インストールに組み込まれます。</p>
<pre> <install modify="true"> または <uninstall modify="true"> (オプションの属性) <uninstall modify="true"> <offering profile="profileID" id="Id" version="Version" features="-"/> </uninstall> </pre>	<p>既存のインストールを変更する場合は、インストール・コマンドおよびアンインストール・コマンドで <install modify="true"> 属性を使用します。この属性が true に設定されていない場合、デフォルト値は false です。修正操作の目的が追加言語パックのインストールのみの場合は、オフリングのフィーチャー ID リストにハイフン「-」を使用して、新規フィーチャーが追加されていないことを示す必要があります。</p> <p>重要: 例に示すように、「modify=true」とハイフン「-」フィーチャー・リストを指定する必要があります。指定しない場合、インストール・コマンドではオフリングのデフォルト・フィーチャーがインストールされ、アンインストール・コマンドではそれらのフィーチャーがすべて除去されます。</p>

応答ファイルのコマンド	説明
Uninstall <pre><uninstall> <offering profile= "profile id" features= "feature ids" id= "offering id" version= "offering version"></offering> <!--add more offerings below> <...> </uninstall></pre>	<p>このコマンドは、アンインストールするパッケージの指定に使用します。</p> <p>プロファイル ID は、既存のプロファイル、または profile コマンドで指定されたプロファイルと一致する必要があります。さらに、フィーチャー ID が指定されない場合は、指定されたオフリングのすべてのフィーチャーがアンインストールされます。オフリング ID が指定されない場合は、指定されたプロファイル内のすべてのインストール済みオフリングがアンインストールされます。</p>
Rollback <pre><rollback> <offering profile= "profile id" id= "offering id" version= "offering version"> </offering> <!--add more offerings below <...> </rollback></pre>	<p>このコマンドは、指定したプロファイルに現在インストールされているバージョンから、指定したオフリングにロールバックする際に使用します。ロールバック・コマンドではフィーチャーを指定できません。</p>
InstallAll <pre><installALL/></pre> <p>注: このコマンドは、以下のコマンドを使用する場合と同等です</p> <pre>-silent -installAll</pre> <p>.</p>	<p>このコマンドは、使用可能なすべてのパッケージをサイレントに検索し、インストールする場合に使用します。</p>
UpdateAll <pre><updateALL/></pre> <p>注: このコマンドは、以下のコマンドを使用する場合と同等です</p> <pre>-silent -updateAll</pre> <p>.</p>	<p>このコマンドは、使用可能なすべてのパッケージをサイレントに検索し、更新する場合に使用します。</p>
License <pre><license policyFile="policy file location"/></pre> <p>例えば、以下のようになります。</p> <pre><license policyFile="c:%mylicense.opt"/></pre>	<p>このコマンドは、記録モードで Installation Manager を開始した後にライセンス・ウィザードを開始して、ライセンス・コマンドを含む応答ファイルを生成する際に使用します。</p> <p>記録モード中にライセンス管理ウィザードで flex オプションを設定すると、その設定は、生成された応答ファイルと同じディレクトリ内にあるライセンス・ポリシー・ファイル「license.opt」に記録されます。応答ファイルには、このポリシー・ファイルを参照するライセンス・コマンドが含まれています。</p>

応答ファイルのコマンド	説明
Wizard <code><launcher -mode wizard -input < response file ></code>	このコマンドは、UI モードで Installation Manager を開始する際に使用します。UI モードでは、インストール・ウィザードまたはアンインストール・ウィザードのいずれかで Installation Manager が開始されます。ただし、この場合、応答ファイルには設定コマンドとインストール・コマンド、または設定コマンドとアンインストール・コマンドのみが含まれます。UI モードで Installation Manager を実行した場合は、同一の応答ファイルにインストール・コマンドとアンインストール・コマンドを混在させることはできません。

サンプル応答ファイル

XML ベースの応答ファイルを使用して、サイレント・インストールの設定、リポジトリ・ロケーション、およびインストール用プロファイルなど、事前定義の情報を指定できます。応答ファイルは、インストール・パッケージをサイレントにインストールし、インストール・パッケージのロケーションおよび設定を標準化することが必要なチームや企業で役立ちます。

サンプル応答ファイル
<pre> <agent-input> <!-- add preferences --> <preference name="com.ibm.cic.common.core.preferences. http.proxyEnabled" value="c:/temp"/> <!-- create the profile if it doesn't exist yet --> <profile id="my_profile" installLocation="c:/temp/my_profile"></profile> <server> <repository location= "http://a.site.com/local/products/sample/20060615_1542/repository/"></repository> </server> <install> <offering profile= "my_profile" features= "core" id= "ies" version= "3.2.0.20060615"> </offering> </install> </agent-input> </pre>

サイレント・インストールのログ・ファイル

サイレント・インストールのログ・ファイルを使用すると、サイレント・インストール・セッションの結果を検査できます。

サイレント・インストール機能では XML ベースのログ・ファイルを作成し、サイレント・インストールの実行結果を記録します (-log <your log file path>.xml

を使用してログ・ファイルのパスを指定した場合)。実行したサイレント・インストールのセッションが成功した場合、ログ・ファイルには `<result> </result>` のルート要素のみが収められます。ただし、インストール時にエラーが発生した場合、サイレント・インストールのログ・ファイルには、以下のようなメッセージを伴ったエラー要素が収められます。

```
<result>
  <error> Cannot find profile: profile id</error>
  <error> some other errors</error>
</result>
```

詳細は分析は、Installation Manager のデータ域に生成されるログを参照することにより可能です。設定コマンドを使用することで、応答ファイルのトピックで示されているように、希望するロケーションにデータ域を設定することもできます。

IBM Packaging Utility

IBM Packaging Utility ソフトウェアは、HTTP または HTTPS で使用可能な Web サーバー上に配置できるリポジトリに製品パッケージをコピーする場合に使用します。

Packaging Utility ソフトウェアは、WebSphere Development Studio Client for iSeries および WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries に付属する補助 CD にあります。HTTP または HTTPS で使用可能な Web サーバー上に WebSphere Development Studio Client パッケージが収容されたリポジトリを配置する場合は、Packaging Utility を使用してそのリポジトリに WebSphere Development Studio Client のパッケージをコピーする必要があります。

このユーティリティは、以下の作業を実行する場合に使用します。

- 製品パッケージ用の新規リポジトリを生成する場合。
- 新規リポジトリに製品パッケージをコピーする場合。単一のリポジトリに複数の製品パッケージをコピーできます。それにより、IBM Installation Manager を使用して製品パッケージをインストールできる、ユーザー組織用の共通ロケーションが作成されます。
- リポジトリから製品パッケージを削除する場合。

このツールの使用に関する完全な説明について、Packaging Utility のオンライン・ヘルプを参照してください。

Packaging Utility のインストール

IBM Packaging Utility を使用して WebSphere Development Studio Client 製品パッケージをコピーするには、このユーティリティを補助 CD からインストールしておく必要があります。

IBM Packaging Utility ソフトウェアをインストールするには、以下の手順を実行します。

1. 補助 CD からインストールを開始します。補助 CD の Aux_CD_Win¥PackagingUtility ディレクトリに移動します。PackagingUtility ディレクトリの下にある PU_win32.zip 内の install_win32.exe を実行します。
2. 使用しているワークステーションで IBM Installation Manager が検出されなかった場合は、それをインストールするよう要求され、インストール・ウィザードが開始します。このウィザードの画面上の指示に従って Installation Manager のインストールを完了します。詳細については、『Windows への Installation Manager のインストール』を参照してください。
3. Installation Manager のインストールが完了するか、または Installation Manager がすでにコンピューターにインストールされている場合は、Installation Manager が起動して「パッケージのインストール」ウィザードが自動的に開始します。
4. 「パッケージのインストール」ウィザードの画面上の指示に従ってインストールを完了します。

Packaging Utility を使用した HTTP サーバーへの製品パッケージのコピー

HTTP または HTTPS サーバーにリポジトリを作成するには、Packaging Utility を使用して WebSphere Development Studio Client を製品パッケージをコピーする必要があります。

この方法では、WebSphere Development Studio Client のインストール・イメージに含まれているオプション・ソフトウェアはコピーされないことに、注意してください。IBM Installation Manager を使用してインストールされる WebSphere Development Studio Client ファイルのみ、コピーされます。

また、Packaging Utility を使用して、複数の製品パッケージを単一のリポジトリ・ロケーションに結合することもできます。詳細は、Packaging Utility のオンライン・ヘルプを参照してください。

Packaging Utility を使用して製品パッケージをコピーするには、以下のようになります。

1. CD イメージからコピーする場合は、以下の作業を実行します。
 - a. 最初のインストール CD を CD ドライブに挿入します。
 - b. システムで自動実行が使用可能に設定されている場合は、自動的に WebSphere Development Studio Client ランチパッド・プログラムが開きます。そのランチパッド・プログラムを閉じます。
2. Packaging Utility を始動します。
3. ユーティリティのメイン・ページで、「製品パッケージのコピー (Copy product package)」をクリックします。「前提条件 (Prerequisite)」ページが開き、2 つのオプションが表示されます。
 - 「IBM Web から製品パッケージをダウンロードする (I will be downloading product packages from IBM Web)」
 - 「その他のソースから製品パッケージを入手する (I will be obtaining the product packages from other sources)」
4. 「IBM Web から製品パッケージをダウンロードする (I will be downloading product packages from IBM Web)」をクリックします。

注: 「その他のソースから製品パッケージを入手する (I will be obtaining the product packages from other sources)」オプションは、アクセス可能リポジトリがすでに定義済みの場合に使用できます。

5. 「次へ」をクリックして、「ソース」ページに進みます。製品パッケージが選択されていない場合は、製品パッケージが含まれているリポジトリを開く必要があります。
6. リポジトリを開くには、「リポジトリを開く」ボタンをクリックします。「リポジトリを開く」ウィンドウが開きます。

注: リポジトリは、ファイル・システム内のディレクトリへのパス、製品の最初の CD が入っているディスク・ドライブ、またはサーバー上のディレクトリへの URL などです。

7. リポジトリ・ロケーションを定義するには、リポジトリ・ロケーションの「参照」ボタンをクリックし、そのリポジトリ・ロケーション (電子ディスク・イメージが含まれている共通ルート・ディレクトリーか、または最初の製品インストール CD が入っているドライブのいずれか) へナビゲートし、選択します。例えば、WebSphere Development Studio Client ファイル (disk1、disk2 など) が C:\My product\unzip に常駐している場合には、このロケーションをリポジトリとして定義する必要があります。
8. 「OK」をクリックしてリポジトリ・ロケーションを定義し、「リポジトリ・ディレクトリーの参照」ウィンドウを閉じます。
9. 「宛先」ページで、「参照」ボタンをクリックして既存のリポジトリ・ディレクトリーを選択するか、製品を保管する新規フォルダーを作成します。
10. 選択した製品パッケージおよびそのフィックスのリポジトリを指定したら、「OK」をクリックして「ディレクトリーを参照」ウィンドウを閉じます。定義したファイル・パスが、「宛先」ページの「ディレクトリー」フィールドにリストされます。
11. 「次へ」をクリックして「要約」ページに進みます。「要約」ページには、宛先リポジトリにコピーされる、選択済みの製品パッケージが表示されます。またこのページには、コピーに必要なストレージ・スペースの量、およびドライブ上の使用可能なスペースの量もリストされます。
12. 「コピー」をクリックして、選択した製品パッケージを宛先リポジトリにコピーします。ウィザードの下部にステータス・バーが開き、コピー・プロセスの残り時間が表示されます。コピー・プロセスが終了すると、「完了」ページが開き、正常にコピーされたすべての製品パッケージが表示されます。
13. 「完了」をクリックして、Packaging Utility のメイン・ページに戻ります。

これで、Packaging Utility を使用して WebSphere Development Studio Client インストール・ファイルをリポジトリにコピーしましたので、そのリポジトリを Web サーバー上に配置して、ディレクトリーおよびファイルを HTTP を通じて使用可能にすることができます。(リポジトリは、UNC ドライブに配置することもできます。)

WebSphere Development Studio Client の開始

WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries は、デスクトップ環境またはコマンド行インターフェースから開始できます。

WebSphere Development Studio Client for iSeries を開始するには、以下のようになります。

- コマンド行から次を実行します: 製品のインストール・ディレクトリー
%eclipse.exe -product com.ibm.etools.iseries.wdsc.welcome.ide
- デスクトップ環境から、「スタート」>「プログラム」>「IBM Software Development Platform」>「WebSphere Development Studio Client for iSeries」の順にクリックします

WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries を開始するには、以下のようになります。

- コマンド行から次を実行します: <製品のインストール・ディレクトリー>%eclipse.exe -product com.ibm.etools.iseries.wdsc.ae.welcome.ide
- デスクトップ環境から、「スタート」>「プログラム」>「IBM Software Development Platform」>「WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries」の順にクリックします

WebSphere Development Studio Client バージョン 7.0 を開始する初回は、新規ワークスペースがデフォルトであることに注意してください。

注: 重要: 既存のワークスペースを WebSphere Development Studio Client バージョン 7.0 で開く場合は、必ずマイグレーションに関する資料を参照した後に実行してください。マイグレーション・ガイドは、ワークベンチのオンライン・ヘルプ (「WebSphere Development Studio Client for iSeries」>「インストールとマイグレーション (Installing and migrating)」の資料にある「ヘルプ」>「ヘルプ目次」) にあります。

インストールの変更

IBM Installation Manager の「パッケージの変更」ウィザードにより、インストール済み製品パッケージの言語およびフィーチャーの選択を変更できます。

デフォルトでは、リポジトリ設定でローカルの変更サイトまたは CD が指定されている場合を除き、インターネット・アクセスが必須です。詳細は、Installation Manager のヘルプを参照してください。

注: 変更前に、Installation Manager を使用してインストールされたプログラムをすべて閉じてください。

1. Installation Manager の「開始」ページで、「**パッケージの変更**」アイコンをクリックします。
2. 「パッケージの変更」ウィザードで、WebSphere Development Studio Client 製品パッケージのインストール・ロケーションを選択し、「**次へ**」をクリックします。
3. 「変更」ページの「言語」でパッケージ・グループの言語を選択し、「**次へ**」をクリックします。そのパッケージのユーザー・インターフェースおよび文書用の、対応する各国語の翻訳がインストールされます。この選択は、このパッケージ・グループでインストールされるすべてのパッケージに適用されることに注意してください。
4. 「フィーチャー」ページで、インストールまたは除去するパッケージ・フィーチャーを選択します。
 - a. フィーチャーについて学習するには、そのフィーチャーをクリックし、「**詳細**」に表示される簡単な説明を検討してください。
 - b. 各フィーチャー間の依存関係を参照する場合は、「**依存関係の表示**」を選択します。「フィーチャー」をクリックすると、その従属先および従属元のすべてのフィーチャーが「依存関係」ウィンドウに表示されます。パッケージ内のフィーチャーを選択または除外すると、Installation Manager は自動的に別のフィーチャーとの依存関係をすべて適用し、また、そのインストール環境に対するダウンロード・サイズおよびディスク・スペースの更新された要件を表示します。
5. フィーチャーの選択が完了したら、「**次へ**」をクリックします。
6. インストール・パッケージを変更する前に、「**要約**」ページで選択項目を検討し、「**変更**」をクリックします。
7. オプション: 変更の処理が終了したら、「**ログ・ファイルの表示**」をクリックして完全なログを確認します。

WebSphere Development Studio Client の更新

IBM Installation Manager を使用してインストールされたパッケージの更新をインストールできます。

デフォルトでは、リポジトリ設定でローカル更新サイトが参照されている場合を除いて、インターネット・アクセスが必要です。詳細は、Installation Manager のヘルプを参照してください。

各インストール済みパッケージには、デフォルトの IBM 更新リポジトリ・ロケーションが組み込まれています。Installation Manager で、インストール済みパッケージの IBM 更新リポジトリ・ロケーションが検索されるようにするには、「リポジトリ」設定ページで「インストールおよび更新中にリンクされたりリポジトリを検索する (Search the linked repositories during installation and updates)」を選択する必要があります。この設定はデフォルトで選択されています。

詳細は、Installation Manager のヘルプを参照してください。

注: 更新の前に、Installation Manager を使用してインストールされたプログラムをすべて閉じてください。

製品パッケージの更新を検索してインストールするには、以下を実行します。

1. Installation Manager の「開始」ページから、「**パッケージの更新 (Update Packages)**」をクリックします。
2. Installation Manager の新規バージョンが検出された場合は、インストールを続行する前に、新規バージョンをインストールすることを確認するプロンプトが出されます。「**OK**」をクリックして、先へ進みます。Installation Manager は、新規バージョンのインストール、停止、再始動、および再開を自動的に行います。
3. 「パッケージの更新」ウィザードで、WebSphere Development Studio Client 製品パッケージがインストールされているロケーションを選択するか、「**すべて更新**」チェック・ボックスを選択し、「**次へ**」をクリックします。Installation Manager は、そのリポジトリ、および WebSphere Development Studio Client に対して事前定義されている更新サイトで更新を検索します。プログレス・バーに、検索中であることが示されます。
4. パッケージ用の更新が検出された場合は、「パッケージの更新」ページにある「**更新**」リスト内の対応パッケージの下に、その更新が表示されます。デフォルトでは、推奨の更新のみが表示されます。使用可能なパッケージ用に検出されたすべての更新を表示するには、「**すべて表示**」をクリックします。
 - a. 更新について詳しくは、その更新をクリックし、「**詳細**」の下の説明を参照してください。
 - b. 更新に関する追加情報が使用可能な場合は、説明文の最後に「**詳細情報**」リンクが表示されます。このリンクをクリックすると、ブラウザーに追加情報が表示されます。更新をインストールする前に、この情報をよくお読みください。

5. インストールする更新を選択します。または、「**推奨を選択**」をクリックして、デフォルトの選択に戻します。依存関係のある更新は、自動的に選択されるとともにクリアされます。
 6. 「**次へ**」をクリックして先に進みます。
 7. 「**ご使用条件**」ページで、選択された更新のご使用条件を参照します。「**ご使用条件**」ページの左側に、選択した更新のご使用条件がリストされます。各項目をクリックすると、ご使用条件のテキストが表示されます。
 - a. すべてのご使用条件に同意する場合は、「**ご使用条件に同意する (I accept the terms of the license agreements)**」をクリックします。
 - b. 「**次へ**」をクリックして先に進みます。
 8. 更新をインストールする前に、「**要約**」ページで選択項目を検討します。
 - a. 前のページで選択した選択項目を変更する場合は、「**戻る**」をクリックして変更します。
 - b. 選択項目が正しい場合は、「**更新**」をクリックして更新をダウンロードし、インストールします。プログレス・バーに、インストールの完了パーセントが表示されます。
- 注: Installation Manager の更新プロセス中に、パッケージの基本バージョン用のリポジトリ・ロケーションを確認するプロンプトが出される場合があります。CD またはその他のメディアから製品をインストールした場合は、更新機能の使用時にそのメディアを用意しておく必要があります。
9. オプション: (オプション) 更新プロセスが完了すると、プロセスの成功を確認するメッセージがページの上部に表示されます。新規ウィンドウで現行セッションのログ・ファイルを開くには、「**ログ・ファイルの表示**」をクリックします。続行する場合は「インストール・ログ」ウィンドウを閉じる必要があります。
 10. 「**終了**」をクリックしてウィザードを閉じます。

WebSphere Development Studio Client のアンインストール

Installation Manager の「パッケージのアンインストール」オプションを使用すると、単一のインストール・ロケーションからパッケージをアンインストールすることができます。インストール済みのすべてのパッケージをすべてのインストール・ロケーションからアンインストールすることもできます。

パッケージをアンインストールするには、製品パッケージをインストールするときに使用したのと同じユーザー・アカウントを使用してシステムにログインする必要があります。

パッケージをアンインストールするには、以下を実行します。

1. Installation Manager を使用してインストールしたプログラムを閉じます。
2. 「開始」ページで「**パッケージのアンインストール (Uninstall Packages)**」アイコンをクリックします。
3. 「**パッケージのアンインストール (Uninstall Packages)**」ページで、アンインストールする WebSphere Development Studio Client 製品パッケージを選択します。「**次へ**」をクリックします。
4. 「要約」ページで、アンインストールされるパッケージのリストを検討し、「**アンインストール**」をクリックします。アンインストールの終了後に「完了」ページが表示されます。
5. 「**終了**」をクリックしてウィザードを終了します。

オプション・ソフトウェアのインストール

WebSphere Development Studio Client for iSeries または WebSphere Development Studio Client Advanced Edition for iSeries 製品には、以下のオプション・ソフトウェアが付属しています。

- IBM Rational Agent Controller バージョン 7.0.1
- IBM CoOperative Development Environment および VisualAge® for RPG バージョン 6.0
- IBM Host Access Transformation Services Toolkit バージョン 7.0
- IBM WebSphere Application Server バージョン 6.1 for Windows
- IBM WebSphere Portal バージョン 6.0 テスト環境 (*Advanced Edition* のみ)
- IBM WebSphere Portal バージョン 5.1.0.x テスト環境 (*Advanced Edition* のみ)
- Crystal Reports Server XI Release 2 for Windows (*Advanced Edition* のみ)
- IBM Rational ClearCase LT バージョン 7.0 for Windows (*Advanced Edition* のみ)

Agent Controller のインストール

Agent Controller は、クライアント・アプリケーションがローカル・アプリケーションまたはリモート・アプリケーションを起動および管理し、アプリケーションの実行に関する情報を別のアプリケーションに提供できるようにするデーモンです。

Agent Controller は、以下のツールを使用する前に、別にインストールする必要があります。

- アプリケーションのプロファイルを作成するプロファイル作成ツール。 Agent Controller は、プロファイルを作成するアプリケーションと同じシステム上にインストールする必要があります。
- リモート・ログ・ファイルをインポートするロギング・ツール。 Agent Controller は、ログ・ファイルのインポート元のリモート・システム上にインストールし、実行する必要があります。
- テスト・ケースを実行するコンポーネント・テスト・ツール。 Agent Controller は、テスト・ケースを実行するシステム上にインストールする必要があります。
- WebSphereApplication Server バージョン 5.0 または 5.1 でリモート・アプリケーションのテストを行うツール。(Agent Controller をアプリケーションのリモート公開用に、またはローカル・アプリケーションの公開またはテスト用にインストールする必要はありません。) WebSphere Application Server バージョン 6.0 にはこの機能が組み込まれているため、バージョン 6.0 のターゲット・サーバーには Agent Controller は必要ありません。

注:

- Agent Controller はファイアウォールの後ろにインストールすることを強くお勧めします。
- Agent Controller の使用によるセキュリティーへの影響についての詳細は、Agent Controller の資料を参照してください。

- Agent Controller のオンライン資料は、このソフトウェアをインストールするまでインストールされません。その時点で資料がオンライン・ヘルプに追加されます。
- Agent Controller バージョン 7.0.1 をインストールする前に、下記の指示に従って以前のバージョンの Agent Controller をアンインストールする必要があります。

Agent Controller のサイレント・インストールについての詳細は、下記の説明を参照してください。

ハードウェア前提条件

- Windows、Linux/IA32: Intel Pentium II プロセッサ以上。Pentium III 500 MHz 以上を推奨。
- AIX®: PowerPC® 604e 233MHz (IBM RS/6000® 7043 43P Series) 以上
- HP-UX: PA8500 300MHz (HP Workstation C3000) 以上
- Solaris: UltraSPARC-III 300MHz (Sun Ultra 10 Workstation) 以上
- OS/400: iSeries (オペレーティング・システムの要件)
- z/OS®, LINUX/S39: zSeries (オペレーティング・システムの要件)
- Linux/ppc64: pSeries® および iSeries をベースにした POWER5™ プロセッサ (オペレーティング・システムの要件)
- 512 MB RAM 以上 (768 MB RAM を推奨)
- ディスク・スペース:
 - インストールには最低 100 MB のディスク・スペースが必要
- モニター解像度:
 - 800 x 600 表示以上 (1024 x 768 を推奨)

サポートされるプラットフォーム

Linux> の場合の注: Agent Controller は、libstdc++-libc6.2-2.so.3 共用ライブラリーを使用してコンパイルされます。この共用ライブラリーが /usr/lib ディレクトリーにあることを確認してください。存在しない場合は、オペレーティング・システムのインストール・メディアに含まれている RPM パッケージ compat-libstdc++ をインストールする必要があります。

Agent Controller v7.0.1 は、以下のプラットフォームでサポートされています。

- PowerPC (32 ビット) 上の AIX v5.2、v5.3、および 5L
- zSeries (32 ビット) 上の z/OS V1R4、V1R5、V1R6、および V1R7
- iSeries 上の OS/400® V5R2、V5R3、および V5R4
- Linux 2.4 および 2.6 カーネル。サポートされる配布先には、以下のようなものがあります。
 - Intel IA32 上の Red Hat Linux Advanced Server v2.1
 - PowerPC (64 ビット) 上の Red Hat Enterprise Linux AS リリース 3
 - Red Hat Enterprise Linux (RHEL) v3.0 および v4.0
 - Intel IA32 上の SUSE Linux Enterprise Server (SLES) v9
 - zSeries (32 ビット) 上の SUSE Linux Enterprise Server (SLES) v8

- Intel IA32 上の Windows 2000 Server または Advanced Server (SP4)
- Intel IA32 上の Windows 2000 Professional (SP3)
- Intel IA32 上の Windows 2003 Server Standard および Enterprise (SP1)
- EM64T (64 ビット) 上の Windows 2003 Server Enterprise x64 Edition (SP1)
- Intel IA32 上の Windows XP Professional (SP2)
- PA-RISC 上の HP-UX v11.0、v11i
- SPARC 上の Sun Solaris v8、v9、および v10.0

サポートされる JVM

一般的に、Agent Controller は Java Virtual Machine (JVM) バージョン 1.4 以上の処理を行います。Agent Controller をテスト済みの JVM バージョン (Java フルバージョン) は、以下のとおりです。

- AIX: J2RE 1.4.1 IBM AIX ビルド ca1411-20040301
- AIX: J2RE 1.5.0 IBM AIX ビルド pap32devifx-20060310 (SR1)
- HP-UX: J2RE 1.4.2.03-040401-18:59-PA_RISC2.0
- Linux for Intel IA32: J2RE 1.4.1 IBM ビルド cxia321411-20040301; J2RE 1.4.2 IBM。
- Linux for Intel IA32: J2RE 1.5.0 IBM Linux ビルド pxi32dev-20060511 (SR2)
- Linux for PPC64: J2RE 1.4.2 IBM ビルド cxp64142-20040917 (JIT 対応: jite)
- Linux for PPC64: J2RE 1.5.0 IBM Linux ビルド pxp64devifx-20060310 (SR1)
- Linux for OS/390®: J2RE 1.4.1 IBM ビルド cx3901411-20040301
- Linux for OS/390: J2RE 1.4.2 IBM ビルド cx390142-20050609
- z/OS: J2RE 1.4.1 IBM z/OS Persistent Reusable VM ビルド cm1411-20030930
- z/OS: J2RE 1.5.0 IBM z/OS ビルド pmz31dev-20051104a
- OS/400: J2RE 1.4 IBM
- OS/400: J2RE 1.5 IBM
- Solaris SPARC: Sun Java 2 Standard Edition (ビルド 1.4.2_04-b05)
- Solaris SPARC: 1.5.0_06-b05
- Windows: IA32 J2RE 1.4.1 IBM Windows 32 ビルド cn1411-20040301a; J2RE 1.4.2 IBM Windows 32; Sun Java 2 Standard Edition (ビルド 1.4.2_04-b05)
- Windows_IA32: 1.5.0_04-b05, J2RE 1.5.0 IBM Windows 32 ビルド pwi32dev-20051222
- Windows_EM64T (64-bit): Sun Java 2 Runtime Environment, Standard Edition (ビルド 1.5.0_06-b05) v1.5.0 06

インストール・ファイルの配置

インストール・ファイルは、Agent Controller ディスクの以下のディレクトリーにあります。

- AIX の場合: <Agent Controller CD>/aix_powerpc
- HP-UX の場合: <Agent Controller CD>/hpux
- OS/400 の場合: <Agent Controller CD>/os400

- z/Series 上の Linux の場合: <Agent Controller CD>/linux_s390
- Intel IA32 上の Linux の場合: <Agent Controller CD>/linux_ia32
- PPC64 上の Linux の場合: <Agent Controller CD>/linux_ppc64
- Solaris の場合: <Agent Controller CD>/solaris_sparc
- Intel IA32 上の Windows の場合: <Agent Controller CD>%win_ia32
- Intel Extended Memory 64 Technology (64 ビット) 上の Windows の場合: <Agent Controller CD>%win_em64t
- Intel Itanium® シリーズ (64 ビット) 上の Windows の場合: <Agent Controller CD>%win_ipf
- z/OS の場合: <Agent Controller CD>/os390

ワークステーション (AIX、HP-UX、Linux、Windows、Solaris) への Agent Controller のインストール

旧バージョンの Agent Controller のアンインストール

- 注: Agent Controller バージョン 7.0.1 をインストールする前に、以前のバージョンの Agent Controller をアンインストールする必要があります。
- Agent Controller 7.0 または 6.x が検出された場合、Agent Controller v7.0.1 インストーラーはインストールをブロックし、「既存の IBM Rational Agent Controller をすべて除去してから再度インストールを実行してください。」という警告を出します。サイレント・インストーラーを使用している場合、Agent Controller v7.0.1 インストーラーは警告を出さずにインストールを終了します。
 - Agent Controller v7.0.1 が以前にインストール済みであることが検出された場合、インストーラーは次の警告を表示します。「この製品はすでに <rac_install_dir> にインストールされています。既存のインストールを上書きする場合は、「次へ」をクリックしてください。(This product is already installed at <rac_install_dir>. To overwrite the existing installation, click "Next".)」インストールを続行すると、インストーラーは既存のインストール済み環境を上書きします。サイレント・インストーラーを使用している場合、既存のインストール済み環境は警告なしで上書きされます。

Windows 上の Agent Controller V6.x をアンインストールする場合は、残留ファイルをすべて手動で削除する必要があります。これを行うには、Agent Controller を停止およびアンインストールして、アンインストール後に残った以下のファイルをすべてクリーンアップします。

Windows:

```
%RASERVER_HOME%*. * (Agent Controller をインストールするディレクトリー)
%SystemRoot%\system32\piAgent.dll (Windows の system32ディレクトリー)
%SystemRoot%\system32\LogAgent.dll
%SystemRoot%\system32\hcbnd.dll
%SystemRoot%\system32\hcc1co.dll
%SystemRoot%\system32\hcc1dt.dll
%SystemRoot%\system32\hcc1s.dll
%SystemRoot%\system32\hcc1serc.dll
```

```
%SystemRoot%\system32\hcc1sert.dll
%SystemRoot%\system32\hcc1sm.dll
%SystemRoot%\system32\hcjbnd.dll
%SystemRoot%\system32\hclaunch.dll
%SystemRoot%\system32\hcthread.dll
%SystemRoot%\system32\piAgent.dll
%SystemRoot%\system32\rac.dll
%SystemRoot%\system32\sysperf.dll
```

UNIX® プラットフォーム上の **Agent Controller V6.x** または **V7.x** をアンインストールする場合は、残留ファイルをすべて手で削除する必要があります。これを行うには、Agent Controller を停止およびアンインストールして、アンインストール後に残った以下のファイルをすべてクリーンアップします。

Linux, AIX, HP-UX, Solaris:

```
$RASERVER_HOME/* (Agent Controller のインストール・
ディレクトリー)
/usr/lib/libpiAgent.so (HP-UX では .sl)
/usr/lib/libLogAgent.so
/usr/lib/libhcbnd.so
/usr/lib/libhcc1co.so
/usr/lib/libhcc1dt.so
/usr/lib/libhcc1s.so
/usr/lib/libhcc1serc.so
/usr/lib/libhcc1sert.so
/usr/lib/libhcc1sm.so
/usr/lib/libhcjbnd.so
/usr/lib/libhclaunch.so
/usr/lib/libhcthread.so
```

バージョン 7.0.1 では、Agent Controller は以下の場所にインストールされます。

Windows: <rac_install_dir>%bin

Linux: <rac_install_dir>/lib

<rac_install_dir> は Agent Controller のインストール・ディレクトリーです。

Agent Controller のインストール

1. 管理者 (またはルート) としてログインします。
2. ディレクトリーを、適切なプラットフォーム用のインストール・ファイルを unzip したディレクトリーに変更します。
3. インストールを続行する前に、すべての Eclipse プラットフォームを閉じてください。
4. プログラム **setup.exe** を実行します。Windows 以外のプラットフォームでは、**setup.bin** を実行します。
5. 初期画面で「次へ」をクリックして、先へ進みます。
6. ご使用条件を読みます。
7. 「使用条件の条項に同意します」を選択し、「次へ」をクリックして先へ進みます。
8. Agent Controller のインストール先のパスを指定し、「次へ」をクリックして先へ進みます。
9. Java ランタイム環境 (JRE) 実行可能プログラム java.exe または Agent Controller が使用する Java のパスを指定します。Agent Controller は、ここで

入力された JRE を使用して Java アプリケーションを起動します。したがって、インストーラー・プログラムによって事前に入力された JRE パスを変更することができます。

注: ここで指定される JRE は、Agent Controller の実行、および Agent Controller による Java アプリケーションの起動の両方に使用されます。ただし、これらの機能ごとに異なる JRE を使用するように、後で Agent Controller を構成することもできます。詳細は、Agent Controller のヘルプ・トピック『*Configuring Applications to be launched by Agent Controller*』を参照してください。

「次へ」をクリックして、先へ進みます。

10. オプション: 上のステップ 9 で「WebSphere Application Server のリモート・サポート」を選択した場合は、IBM WebSphere Application Server のバージョンを指定します。「次へ」をクリックして、先へ進みます。
11. オプション: 上のステップ 9 で「WebSphere Application Server のリモート・サポート」を選択した場合は、IBM WebSphere Application Server バージョン 5.0 (Windows のみ) および 5.1 のパスを指定します。「次へ」をクリックして、先へ進みます。
12. Agent Controller へのアクセスが可能なホストを指定します。以下の選択肢があります。
 - **このコンピューターのみ。** そのローカル・ホストのみ、Agent Controller にアクセスできます。
 - **特定のコンピューター。** 指定されたリストのクライアントが Agent Controller にアクセスできます。このオプションを選択する場合で、かつ上のステップ 9 でセキュリティーを選択した場合は、「次へ」をクリックして「アクセス・リスト」パネルに進みます。コマで区切られた、Agent Controller にアクセスできるホスト名のリストを入力します。
 - **任意のコンピューター。** すべてのクライアントが Agent Controller にアクセスできます。(これがデフォルトで選択されています。)

注: Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) などの認証メカニズムを使用している場合で、「任意のコンピューター」を選択する場合は、インストール・プロセスの完了後に、Agent Controller ユーザー認証を使用不可にする必要があります。詳細は、Agent Controller の資料を参照してください。

「次へ」をクリックして、先へ進みます。

13. セキュリティー設定を選択します。

注: 「任意のコンピューター」を選択した場合、セキュリティーはデフォルトで使用可能に設定されます (後述の「使用可能」を参照してください)。通信は暗号化され、すべての接続に対して認証が行われます。セキュリティーを使用不可にする方法については、Agent Controller の資料を参照してください。

- **使用不可:** 通信は暗号化されず、アクセス制御は定義されたホスト・リストに制限されます。(「任意のコンピューター」以外の場合、デフォルトで選択されます。)

- **使用可能:** 通信は暗号化され、すべての接続に対してセキュア・ソケット通信の認証が強制されます。

「使用可能」を選択した場合は、「次へ」をクリックし、「**セキュリティ**」の下に、Agent Controller に接続できるユーザーのコンマで区切られたリストを入力します。これらのユーザーは、ツール使用の認証を受ける必要があります。

「次へ」をクリックして、先へ進みます。

14. 要約画面で「次へ」をクリックして、Agent Controller をインストールします。
15. インストールが完了したら、「終了」をクリックします。

Agent Controller のサイレント・インストール

セットアップ・コマンドで以下のパラメーターを使用することによって、インストール・プロセスをサイレント・モードで実行することができます。

パラメーター	説明
-silent この変数は、サイレントを使用する場合には必須です。 -V licenseAccepted=true	オプション: サイレント・モードで実行することをインストーラーに通知します。これを指定しない場合、パス済みの入力内容を含むインストール・ウィザードが表示されます。
-P installLocation	オプション: インストール・パスを指定します。デフォルトのインストール・パスは、「\$D(install)/IBM/AgentController」です。 例: Windows の場合: C:\Program Files\IBM\AgentController UNIX[®]/Linux の場合: /opt/IBM/AgentController
-V VJavaPath	必須: Java 実行可能ファイルの完全修飾パスを指定します。
-V VAccessLocal -V VAccessCustom -V VAccessAll	オプション: クライアントから Agent Controller への可能な接続方法 (ALL、LOCAL、CUSTOM) を指定します。変数のいずれか 1 つのみを「true」に設定し、その他は false に設定します。デフォルトでは、VAccessAll="true" になっています。 <ul style="list-style-type: none"> • 任意のコンピューター: VAccessAll="true" : すべてのクライアントを許可します • このコンピューターのみ: VAccessLocal="true" : ローカル・ホストのみを許可します (デフォルト) • 特定のコンピューター: VAccessCustom="true" : リストにあるクライアントを許可します (-V VHosts パラメーターも必要)

パラメーター	説明
-V VHosts	必須 (VAccessCustom="true" の場合) クライアントのホスト名を、コンマで区切って指定します。
以下の 2 つの変数を両方とも指定し、反対の設定をする必要があります。 -V VSecurity="true" or "false" -V VSecurityDisable="false" or "true"	オプション: (true, false) デフォルト: VSecurity=true VSecurityDisable=false
-V VUsers	必須: (VSecurity="true" の場合) Agent Controller に接続できるユーザーを指定します。
-V VWAS6 -V VWAS5	オプション: -V VWAS6="true" (デフォルト) : WAS V6 が使用される場合 -V VWAS5="true" : WAS V5.x が使用される場合
-V VWAS_HOME_V50 -V VWAS_HOME_V51	オプション: (-V VWAS5="true" の場合) IBM WebSphere Application Server 5.1 および 5.0 のインストール・ロケーションを指定します。

例:

コマンド行からインストールする場合:

```
-P installLocation="D:¥IBM¥AgentController"

-V VJavaPath=" D:¥jdk1.4.2¥jre¥bin¥java.exe "

-V VAccessLocal="false"

-V VAccessCustom="true"

-V VAccessAll="false"

-V VHosts="host1,host2"

-V VSecurity="true"

-V VSecurityDisable="false"

-V VUsers="user1,user2"

-V VWAS5="true"

-V VWAS_HOME_V51="D:¥WebSphere5.1¥AppServer"

-V VWAS_HOME_V50="D:¥WebSphere5.0¥AppServer"
```

応答ファイルを使用してインストールする場合:

すべてのパラメーターをコマンド行で指定するのではなく、応答ファイル (例えば setup.rsp) を作成して保管することができます。以下は Windows の例ですが、Linux/UNIX プラットフォームの場合もこれに似ています。

```
setup.exe -silent -options setup.rsp
```

応答ファイルの内容:

```
# Start of response file

-P installLocation="D:¥IBM¥AgentController"

-V licenseAccepted="true"

-V VJavaPath=" D:¥jdk1.4.2¥jre¥bin¥java.exe "

-V VAccessLocal="false"

-V VAccessCustom="true"

-V VAccessAll="false"

-V VHosts="host1,host2"

-V VSecurity="true"

-V VSecurityDisable="false"

-V VUsers="user1,user2"

-V VWAS5="true"

-V VWAS_HOME_V51="D:¥WebSphere5.1¥AppServer"

-V VWAS_HOME_V50="D:¥WebSphere5.0¥AppServer"


# End of response file
```

Windows ワークステーションでの Agent Controller の開始および停止

- Windows では、Agent Controller システム・サービス (RASvc.exe) は自動的に開始されます。
- コントロール パネルの下の Windows サービスのダイアログを使用して、Agent Controller サービスを開始または停止します (「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」>「管理ツール」>「サービス」>「IBM Rational[®] Agent Controller」)。

Windows 以外のワークステーションでの Agent Controller の開始および停止

- Windows 以外のプラットフォームでは、Agent Controller プロセス (RASvc) は自動的に開始しません。手動で開始する必要があります。
- **重要:** Windows 以外のプラットフォームの場合は、Agent Controller を開始する前に、以下の環境設定を設定する必要があります。
 - **Solaris:** Agent Controller を開始する前に、/usr/sbin を PATH 環境に追加する必要があります。このパスを設定するには、以下のコマンドを入力します。

```
PATH=/usr/sbin:$PATH
export PATH
```

- **AIX:** 特定の JVM では、LDR_CNTRL 環境変数を設定して、USERREGS が Agent Controller で正常に機能する必要がある場合があります。この変数を設定するには、RAStart.sh スクリプトを実行する前に、以下のコマンドを実行する必要があります。

```
export LDR_CNTRL=USERREGS
```

- **Linux、AIX、Solaris、HP-UX、z/OS:** RAServer は、ライブラリー・パス環境変数へ追加する、libjvm.so のような実行可能ライブラリーを収める JRE のディレクトリを必要とします。下の表は、そのプラットフォーム用にサポートされている JVM のデフォルトのインストール・ロケーションに基づいた、各プラットフォームのパス変数の設定を示しています。

注: 入力するパスは、Agent Controller のインストール時に指定する JRE のパスと一致している必要があります。指定した JRE は、Agent Controller が Java アプリケーションを起動する際に使用されます。

プラットフォーム	ライブラリー・パス設定
AIX	LIBPATH=/usr/java14/jre/bin: /usr/java14/jre/bin /classic:\$LIBPATH export LIBPATH
HP-UX	SHLIB_PATH=/opt/java1.4/jre/ lib/PA_RISC/server:/opt/java1.4/ jre/lib/PA_RISC:\$SHLIB_PATH export SHLIB_PATH
Linux/IA32	LD_LIBRARY_PATH=/opt/IBMJava2-141/ jre/bin/classic:/opt/IBMJava2-141/ jre/bin:\$LD_LIBRARY_PATH export LD_LIBRARY_PATH
Linux/PPC64	LD_LIBRARY_PATH=/opt/IBMJava2-ppc64-142/ jre/bin:/opt/IBMJava2-ppc64-142/ jre/bin/classic:\$LD_LIBRARY_PATH export LD_LIBRARY_PATH
Linux/390	LD_LIBRARY_PATH=/opt/IBMJava2-s390-141/ jre/bin/classic:/opt/IBMJava2-s390-141/ jre/bin:\$LD_LIBRARY_PATH export LD_LIBRARY_PATH
Solaris	LD_LIBRARY_PATH=/usr/j2sdk1.4.2_04/ jre/lib/sparc/server: /usr/j2sdk1.4.2_04/jre/lib/ sparc:\$LD_LIBRARY_PATH export LD_LIBRARY_PATH
z/OS	LIBPATH=/usr/lpp/java/IBM/ J1.4/bin/classic:/usr/lpp /java/IBM/J1.4/bin:\$LIBPATH export LIBPATH

- Agent Controller プロセスを開始するには、インストール・ロケーションの **bin** ディレクトリー (例えば、/opt/IBM/AgentController/bin) に移動して、以下を実行します。

```
./RAStart.sh
```

- Agent Controller プロセスを停止するには、インストール・ロケーションの **bin** ディレクトリー (例えば、/opt/IBM/AgentController/bin) に移動して、以下を実行します。

```
./RAStop.sh
```

Windows ワークステーションでの Agent Controller のアンインストール

- Agent Controller の削除は、「コントロール パネル」の「プログラムの追加と削除」ダイアログから行うことができます。
- サイレント・アンインストールを実行するには、インストール・ロケーションの **_uninst** ディレクトリー (例えば、C:\Program Files\IBM\AgentController_uninst) で、コマンド `uninstall.exe -silent` を実行します。

Windows 以外のワークステーションでの Agent Controller のアンインストール

1. インストール・ロケーションの **_uninst** ディレクトリー (例えば、/opt/IBM/AgentController/_uninst) で、プログラム **uninstall.bin** を実行します。
2. 表示される指示に従って、アンインストールを完了します。
3. サイレント・アンインストールを実行するには、コマンド `uninstall.bin -silent` を使用します。

ワークステーション上に複数の参照がある Agent Controller のアンインストール

Agent Controller バージョン 7.0.1 は、単一のワークステーションから製品の複数のインスタンスがインストールされるのを防ぎます。独立したインストールか、または製品に組み込まれているインストールのいずれかで追加のインストールが行われた場合、Agent Controller はその新しいインストールを開始した製品名への参照を記録します。

独立したインストールか、または製品に組み込まれているインストールのいずれかで Agent Controller が複数回インストールされた場合 (つまり、参照数が複数ある場合) には、最後に参照される製品も Agent Controller を必要とするため、最後に参照される製品をアンインストールする場合にのみ、Agent Controller をアンインストールすることができます。

別の製品がまだ Agent Controller を必要としているときに Agent Controller のアンインストールを試行すると、そのアンインストールは処理されず、「この製品は別の製品が必要としているため、アンインストールできません。(This product cannot be uninstalled as it is required by another product.)」というメッセージが表示されます。

OS/400 (iSeries) への Agent Controller のインストール

旧バージョンの Agent Controller のアンインストール

以前のバージョンの Agent Controller がある場合は、このバージョンをインストールする前に停止し、アンインストールしてください。

Agent Controller のインストール

1. iSeries ホストで、HYADESDC というライブラリーと、IBMRAC という別のライブラリーを作成します。

```
CRTLIB HYADESDC  
CRTLIB IBMRAC
```

2. iSeries ホストで、HYADESDC ライブラリー内に HYADESDC.SAVF という空の保管ファイルを作成します。

```
CRTSAVF HYADESDC/HYADESDC
```

3. iSeries ホストで、IBMRAC ライブラリー内に IBMRAC.SAVF という空の保管ファイルを作成します。

```
CRTSAVF IBMRAC/IBMRAC
```

4. FTP を使用して、インストール CD に入っているファイル IBMRAC.SAVF を、iSeries ホスト上のライブラリー IBMRAC に BINARY モードの転送を使用して追加します。

5. FTP を使用して、インストール CD に入っているファイル HYADESDC.SAVF を、iSeries ホスト上のライブラリー HYADESDC に BINARY モードの転送を使用して追加します。

6. iSeries ホスト上にある保管ファイル HYADESDC.SAVF を、以下のように入力することでライブラリー HYADESDC に復元します。

```
RSTOBJ OBJ(*ALL) SAVLIB(HYADESDC) DEV(*SAVF) SAVF(HYADESDC/HYADESDC)
```

7. iSeries ホスト上にある保管ファイル IBMRAC.SAVF を、以下のように入力することでライブラリー IBMRAC に復元します。

```
RSTOBJ OBJ(*ALL) SAVLIB(IBMRAC) DEV(*SAVF) SAVF(IBMRAC/IBMRAC)
```

8. QShell を開始し、統合ファイル・システム (IFS) 上に /opt/hyadesdc ディレクトリーを作成します。

9. HYADESDC 内の保管ファイル HYADESIFS.SAVF を、IFS ディレクトリー /opt/hyadesdc に復元します。例えば、以下のようになります。

```
RST DEV('/QSYS.LIB/HYADESDC.LIB/HYADESIFS.FILE')  
OBJ('/opt/hyadesdc/*')
```

10. IBMRAC 内の保管ファイル IBMRACIFS.SAVF を、IFS ディレクトリー /opt/hyadesdc に復元します。例えば、以下のコマンドを 1 行で入力します。

```
RST DEV('/QSYS.LIB/IBMRAC.LIB/IBMRACIFS.FILE') OBJ('/opt/hyadesdc/*')  
ALWOBJDIF(*ALL)
```

各国語パックをインストールする場合は、下記のステップ 11 から 16 までを完了します。インストールしない場合は、ステップ 17 に進みます。

11. iSeries ホストで、HYADESDC ライブラリー内に HYADESNL1.SAVF および HYADESNL2.SAVF という 2 つの空の保管ファイルを作成します。

```
CRTSAVF IBMRAC/HYADESNL1  
CRTSAVF IBMRAC/HYADESNL2
```

12. FTP を使用して、インストール CD に入っている NL ファイル HYADESNL1.SAVF および HYADESNL2.SAVF を、iSeries ホスト上のライブラリー HYADESDC に BINARY モードの転送を使用して追加します。
13. iSeries ホストで、IBMRAC ライブラリー内に IBMRACNL1.SAVF および IBMRACNL2.SAVF という 2 つの空の保管ファイルを作成します。

```
CRTSAVF IBMRAC/IBMRACNL1
CRTSAVF IBMRAC/IBMRACNL2
```
14. FTP を使用して、インストール CD に入っている NL ファイル IBMRACNL1.SAVF および IBMRACNL2.SAVF を、iSeries ホスト上のライブラリー IBMRAC に BINARY モードの転送を使用して追加します。
15. HYADESDC 内の保管ファイル HYADESNL1.SAVF および HYADESNL2.SAVF を、IFS ディレクトリー /opt/hyadesdc に復元します。例えば、以下のコマンドを 1 行で入力します。

```
RST DEV('/QSYS.LIB/HYADESDC.LIB/HYADESNL1.FILE') OBJ
('/opt/hyadesdc/*') ALWOBJDIF(*ALL)
RST DEV('/QSYS.LIB/HYADESDC.LIB/HYADESNL2.FILE') OBJ
('/opt/hyadesdc/*') ALWOBJDIF(*ALL)
```
16. IBMRAC 内の保管ファイル IBMRACNL1.SAVF および IBMRACNL2.SAVF を、IFS ディレクトリー /opt/hyadesdc に復元します。例えば、以下のコマンドを 1 行で入力します。

```
RST DEV('/QSYS.LIB/IBMRAC.LIB/IBMRACNL1.FILE') OBJ('/opt/hyadesdc/*')
ALWOBJDIF(*ALL)
RST DEV('/QSYS.LIB/IBMRAC.LIB/IBMRACNL2.FILE') OBJ('/opt/hyadesdc/*')
ALWOBJDIF(*ALL)
```
17. Agent Controller をインストールしたら、ディレクトリーをインストール・ローケーションの bin ディレクトリー /opt/hyades/bin に変更し、以下のように入力してセットアップ・スクリプトを実行します。

```
./SetConfig.sh
```
18. 表示されるプロンプトに従って、Agent Controller を構成します。

OS/400 (iSeries) での Agent Controller の開始および停止

1. Agent Controller を開始するには、HYADESDC ライブラリーおよび IBMRAC ライブラリーをライブラリー・リストに追加します。

```
ADDLIB HYADESDC
ADDLIB IBMRAC
```
2. 以下のように入力して、RAStart ジョブの実行を依頼します。

```
SBMJOB CMD(CALL RASERVER) JOBD(RASTART)
```
3. Agent Controller を停止するには、以下のように入力して RAStart ジョブを終了します。

```
ENDJOB JOBD(RASTART)
```

あるいは、ディレクトリーをインストール・ローケーションの bin ディレクトリー /opt/hyades/bin に変更して、停止スクリプトを実行します。

```
./RAStop.sh
```

OS/400 (iSeries) 上の Agent Controller のアンインストール

1. HYADESDC および IBMRAC ライブラリーを削除します。

2. IFS ディレクトリー /opt/hyadesdc (すべてのサブディレクトリーおよびファイルを含む) を削除します。

z/OS (OS/390) への Agent Controller のインストール

旧バージョンの Agent Controller のアンインストール

以前のバージョンの Agent Controller がある場合は、このバージョンをインストールする前に停止し、アンインストールしてください。

Agent Controller のインストール

1. UNIX System Services シェルで、Agent Controller をインストールするディレクトリーに移動します。 /usr/lpp/ ディレクトリーへのインストールが推奨されています。
2. インストール・イメージ **ibmrac.os390.pax**、**tptpdc.os390.pax** をインストール・ディレクトリーに転送します。
3. 以下のコマンドを発行して、Agent Controller ファイルを抽出します。

```
pax -ppx -rvf ibmrac.os390.pax
```

4. 以下のコマンドを発行して、テストおよびパフォーマンス・ツール (TPTP) Agent Controller ファイルを抽出します。

```
pax -ppx -rvf tptpdc.os390.pax
```

5. ディレクトリーをインストール bin ディレクトリー <rac_install_dir>/bin に変更し、以下のように入力して Agent Controller ライブラリーへのリンクを作成するスクリプトを実行します。

```
./createLinks.sh
```

6. UNIXSystem Services シェルで以下のコマンドを発行して、Agent Controller 共用オブジェクト・ファイルをプログラムの制御下に置きます。

```
extattr +p /usr/lpp/IBM/AgentController/lib/*.so
```

各国語パックをインストールする場合は、下記のステップ 7 および 8 を完了します。インストールしない場合は、ステップ 9 に進みます。

7. NL インストール・イメージ **tptpdc.nl1.os390.pax**、**tptpdc.nl2.os390.pax**、**ibmrac.os390.nl1.pax**、**ibmrac.os390.nl2.pax** を、インストール・ディレクトリーに転送します。

8. 以下のコマンドを発行して、Agent Controller ファイルを抽出します。

```
pax -ppx -rf tptpdc.nl1.os390.pax
pax -ppx -rf tptpdc.nl2.os390.pax
pax -ppx -rf ibmrac.os390.nl1.pax
pax -ppx -rf ibmrac.os390.nl2.pax
```

9. Agent Controller をインストールしたら、ディレクトリーをインストール・ロケーションの bin ディレクトリー /usr/lpp/IBM/AgentController/bin に変更し、以下のように入力してセットアップ・スクリプトを実行します。

```
./SetConfig.sh
```

10. 表示されるプロンプトに従って、Agent Controller を構成します。

z/OS での Data Channel の使用法:

serviceconfig.xml ファイルで大きな dataChannelSize を設定するには、そのマシンに設定されている共用メモリー・セグメントの最大サイズの増加が必要になる場合があります。これを行うには、BPXPRMxx parmlib メンバー内の IPCSHMMPAGES の値を増やします。この値は、使用するデータ・チャネルに可能な 4K ページの最大数です。例えば、dataChannelSize を 32M に設定するには、IPCSHMMPAGES を 8192 より大きな値に設定する必要があります。

Agent Controller が多数のエージェントと同時に通信できるようにするには、BPXPRMxx parmlib メンバー内の IPCSHMNSEGS 値を、適切な値に設定する必要があります。この値は、各アドレス・スペースに付加される共用メモリー・セグメントの最大数を指定します。デフォルト値は 10 ですので、50 に増やす必要があります。

Agent Controller によって使用されるデータ・チャネルについての詳細は、Agent Controller のオンライン・ヘルプ情報を参照してください。

z/OS BPXPRMXX parmlib メンバーおよびその更新方法についての詳細は、「*IBM z/OS MVS™ Initialization and Tuning Reference*」を参照してください。

z/OS (OS/390) での Agent Controller の開始および停止

注: RAServer では、LIBPATH 環境変数へ追加する、libjvm.so のような実行可能ライブラリーを収める JRE のディレクトリーが必要です。例えば、IBM JRE 1.4.1 を使用している場合、LIBPATH 変数は以下のように設定されます。

```
export LIBPATH=/usr/lpp/java/IBM/J1.4/bin/classic:
/usr/lpp/java/IBM/J1.4/bin:$LIBPATH
```

- ルートとしてログインしてサーバーを始動し、/usr/lpp/IBM/AgentController/bin ディレクトリーを開いて以下のコマンドを発行します。

```
./RAStart.sh
```

- サーバーを停止するには、ルートとしてログインし、/usr/lpp/IBM/AgentController/bin ディレクトリーを開いて以下のコマンドを発行します。

```
./RAStop.sh
```

z/OS (OS/390) 上の Agent Controller のアンインストール

- Agent Controller のインストール時に createLinks.sh を実行した場合は、/usr/lpp/IBM/AgentController/bin ディレクトリーに移動して以下のコマンドを発行します。

```
./removeLinks.sh
```

- 以下のコマンドを発行して、IBMRAC ディレクトリーおよびそのサブディレクトリーをすべて削除します。

```
rm -rf /usr/lpp/IBM/AgentController
```

Agent Controller セキュリティー・フィーチャーの使用

以下のリストには、すべてのプラットフォームで Agent Controller セキュリティー・フィーチャーを使用するためのヒントが含まれています。

- 認証は、オペレーティング・システムによって提供されます。認証されるのは、インストール時に指定されたユーザーのみです。ユーザー名を ANY と指定する

と、有効なすべてのユーザー名とパスワードのペアが、認証用にオペレーティング・システムに転送されます。それ以外の場合は、リストされているペアのみが転送されます。

- セキュリティーが使用可能に設定されている場合、インストール時に指定したユーザーは、なんらかの情報を Agent Controller と交換する前に、オペレーティング・システムによって認証される必要があります。ワークベンチ・ユーザーは、オペレーティング・システムのユーザー名およびパスワードである有効なユーザー名とパスワードの組み合わせを提供する必要があります。
- **(Windows のみ)** ドメイン・ネーム・パスワードは認証されません。ローカル・ユーザー名とパスワードのペアを提供する必要があります。
- 鍵管理機能は提供されていません。Agent Controller は、セキュリティーに Java 鍵ストアを使用します。
- デフォルトの鍵ストアおよびエクスポート済み証明書は、Agent Controller のディレクトリー <rac_install_dir>%security (Windows の場合) および <rac_install_dir>/security (Linux の場合) にあります。ただし、<rac_install_dir> は Agent Controller のインストール・ディレクトリーです。これらはサンプルにすぎません。これらを、意味のある証明書が含まれている鍵ストアに置き換えてください。

ワークベンチと Agent Controller の互換性のまとめ

下位互換性 (バージョン 6.0.1 の Agent Controller で古いワークベンチを使用する場合): はい、新しい Agent Controller はそれ以前のバージョンの機能 (例えば、コントロール・チャンネルにおけるセキュリティーなど) をすべてサポートしているため、互換性があります。ただし、多重方式 (データを保護するため、コントロール・チャンネルを通じてデータを戻す) などの新しい機能を使用できなくなります。

上位互換性 (古い Agent Controller で 6.0.1 ワークベンチを使用する場合): いいえ、通常はサポートされていません。

バージョンの異なる Agent Controller 間の互換性: 一部の製品またはツール (IBM Performance Optimization Toolkit など) では、複数の (ワークベンチではなく) ホスト上の Agent Controller が相互に「発見」し、通信する必要があります。あるバージョンによって機能の周囲に変更が加えられるということは、その機能を使用する必要がある場合には、関連するすべてのホストで Agent Controller バージョン 6.0.0.1 または Agent Controller バージョン 6.0.1 のいずれかを使用する必要があることを意味します。つまり、Agent Controller インスタンス間で動的ディスクバリアーを使用する場合には、バージョンのミックス・アンド・マッチを行うことはできません。

既知の問題および制限

このセクションでは、Agent Controller のインストールおよびアンインストールに関連した、既知の問題および制限について説明します。特に記述していない限り、以下の情報は Agent Controller をサポートしているすべてのオペレーティング・システムに適用されます。

Windows 以外のプラットフォームで Agent Controller の始動に失敗する場合があります

Windows 以外のプラットフォームで、Agent Controller の始動に失敗し、以下のメッセージが表示される場合があります。

RAServer failed to start.

この失敗は通常、TCP/IP ポート 10002 が空いていないことに起因します。Agent Controller はデフォルトでこのポートを listen します。Agent Controller の始動時にそのシステム上で実行されている他のプロセスがこのポートを使用していたか、Agent Controller の停止後、ポートが解放される前に再始動された可能性があります。

Agent Controller の始動に失敗した場合は、以下のようにして始動することができます。

- ポート 10002 が別のプロセスによって使用されている場合は、serviceconfig.xml ファイルを編集することでポート番号を変更することができます。これについては資料で説明しています。

注: serviceconfig.xml ファイルで構成される通信ポート番号が変更された場合は、WebSphere Application Server 構成で定義されるプロパティ `INSTANCE_RAC_PORT_NUM_ID` も、同じポート番号に変更する必要があります。

- Agent Controller を停止したばかりの場合は、数分待ってから再始動を試行してください。

インストール中およびアンインストール中のその他のエラー

インストール中またはアンインストール中にエラーが発生した場合、その原因は Agent Controller のオブジェクト・ファイルが、実行中のプロセスによってロードされたことにある可能性があります。オブジェクト・ファイルが変更可能であることを確認するには、以下のようにします。

1. ご使用の Eclipse ワークベンチをシャットダウンします。
2. Java Profiling Agent または J2EE Request Profiler のいずれかを含んでいるすべての java.exe プロセスを終了します。

CoOperative Development Environment および VisualAge for RPG バージョン 6.0 のインストール

CoOperative Development Environment および VisualAge for RPG バージョン 6.0 は、iSeries アプリケーション・プログラムの開発および保守のための柔軟なワークステーション・ツールおよびホスト・ツールのセットです。VisualAge for RPG は、Windows GUI によるクライアント RPG アプリケーションのビルド、および iSeries リソースへの透過的なアクセスが可能な、ビジュアル開発環境です。

IBM CODE および VisualAge RPG バージョン 6.0 の「インストール・ガイド」を表示するには、以下を実行します。

1. CoOperative Development Environment および VisualAge for RPG V6.0 のオプション・ソフトウェア CD を挿入します。

2. この CD のルート・ディレクトリーで `install.htm` ファイルを開き、インストール・ガイドを表示します。

Host Access Transformation Services Toolkit バージョン 7.0 のインストール

Host Access Transformation Services は、ソース・コードにアクセスしたり、変更したりすることなく、3270 および 5250 の画面を HTML に動的に変換するツールを提供します。HATS CD を挿入してその製品の「始めに」の文書を参照し、Host Access Transformation Services Toolkit バージョン 7.0 のインストールに関する詳しい情報を入手してください。

IBM WebSphere Application Server バージョン 6.1 for Windows のインストール

詳細を入手し、IBM WebSphere Application Server バージョン 6.1 for Windows をインストールするには、WebSphere Application Server CD を挿入します。そのランチパッド・プログラムが自動的に開きます。画面上の指示に従ってインストールしてください。インストール手順の詳細については、WebSphere Application Server バージョン 6.1 の文書を参照してください。

WebSphere Portal テスト環境バージョン 5.1.0.x のインストール

ポータル・テスト環境では、WebSphere Development Studio Client ワークベンチからポータル・アプリケーションをテストできます。

Windows と Linux の各ワークステーションにおける WebSphere Portal 5.1.0.x のインストールおよびアンインストールについての詳細な説明、およびシステム要件の詳細については、<http://www.ibm.com/websphere/portal/library> にある WebSphere Portal 5.1 インフォメーション・センターを参照してください。

CD-ROM または電子イメージからの WebSphere Portal テスト環境バージョン 5.1.0.x のインストール

ポータル・テスト環境をインストールする前に、WebSphere Development Studio Client をインストールしておく必要があります。ポータル・テスト環境のインストールを開始する前に、WebSphere Development Studio Client を停止することをお勧めします。

WebSphere Portal テスト環境 5.1.0.x をインストールするには、以下のステップを実行してください。

1. WebSphere Application Server、WebSphere Portal、WebSphere Application Server 統合テスト環境、または WebSphere Portal 統合テスト環境のいずれかをインストール済みの場合は、それらのテスト環境がすべて停止していることを確認するとともに、HTTP サーバーをすべて停止します。停止されていないと、インストールに失敗する場合があります。
2. 以下のいずれかの方法を使用して、WebSphere Portal テスト環境バージョン 5.1 のインストール・プログラムを開始します。

- WebSphere Development Studio Client ランチパッド・プログラム (37 ページの『ランチパッド・プログラムの開始』を参照) で、「**WebSphere Portal V5.1 テスト環境**」をクリックします。
- WebSphere Portal 5.1.0.x のセットアップ CD を挿入します。Windows システムの場合はインストール・プログラムが自動的に開始します。自動的に開始しない場合、または Linux システム上にインストールする場合は、セットアップ CD またはディスク・イメージのルートから次のコマンドを実行します。
 - Windows の場合: `install.bat -W dependency.useValidation=false`
 - Linux の場合: `install.sh -W dependency.useValidation=false`

注: 電子イメージからインストール・プログラムを開始した場合は、「不正なインタープリター : そのようなファイルまたはディレクトリはありません (:bad interpreter : no such file or directory)」のエラーが表示される場合があります。インストールを正常に開始するには、セットアップ・ディスク・イメージのディレクトリに移動し、コマンド `dos2unix install.sh -W dependency.useValidation=false` を実行します。

3. インストール・プログラム実行時の言語を選択し、「**OK**」をクリックして続行します。
4. インストール・プログラムのウェルカム・ページの情報を読み、「**次へ**」をクリックします。
5. 「ご使用条件」に同意して、「**次へ**」をクリックします。
6. 「**テスト環境**」ラジオ・ボタンを選択し、「**次へ**」をクリックします。プラットフォームによっては、オペレーティング・システムの前提条件検査が失敗したことを示すエラー・メッセージが表示される場合があります。これは、一部のオペレーティング・システム (例えば、Red Hat Enterprise Linux Workstation Version 3.0 など) がポータル・テスト環境でのみサポートされているために発生します。このメッセージは無視しても支障はありません。「**OK**」をクリックしてインストールを続行してください。
7. WebSphere Application Server V5.1 に対してデフォルトのインストール・ディレクトリを受け入れるか、またはブラウズして新規のディレクトリを選択し、「**次へ**」をクリックします。デフォルトのインストール・ディレクトリは、Windows では `C:\Program Files\Portal51UTE\AppServer`、Linux では `opt/Portal51UTE/AppServer` です。容量が不足している場合を除いて、デフォルトのインストール・ディレクトリが推奨されます。
8. ポータル・テスト環境に対してデフォルトのインストール・ディレクトリを受け入れるか、またはブラウズして新規のディレクトリを選択し、「**次へ**」をクリックします。デフォルトのインストール・ディレクトリは、Windows では `C:\Program Files\Portal51UTE\PortalServer`、Linux では `opt/Portal51UTE/PortalServer` です。容量が不足している場合を除いて、デフォルトのインストール・ディレクトリが推奨されます。
9. ポータル・テスト環境で使用するユーザー ID およびパスワードを指定します。「**次へ**」をクリックします。
10. 要約画面に表示される情報を検討し、「**次へ**」をクリックします。

11. プロンプトが出されたら、適切な WebSphere Portal 5.1 CD を挿入し、そのドライブ・ロケーションを指定します。
12. インストールが完了したら、「終了」をクリックしてインストール・プログラムを閉じます。

WebSphere Portal 構成リポジトリとしての DB2 または Oracle データベースの使用

WebSphere Portal 5.1 テスト環境ではデフォルトで、ポータル・リソースにアクセスするユーザー ID、資格情報、およびアクセス権に関する情報の保管用に Cloudscape™ データベースをインストールして使用します。Cloudscape は、WebSphere Portal の標準装備の Java データベースであり、基本ポータル環境に適合しています。

DB2 または Oracle データベースのインストールおよび構成については、www.ibm.com/websphere/portal/library の『WebSphere Portal V5.1 InfoCenter』を参照してください。WebSphere Portal バージョン 5.1 InfoCenter の「構成」→「データベース」に説明があります。InfoCenter にある構成の説明を参照する場合は、InfoCenter における `<wp_root>` は WebSphere Portal 5.1 テスト環境のインストール・ディレクトリーに対応し、`<was_root>` は WebSphere Application Server V5.1 のインストール・ディレクトリーに対応していることに注意してください (デフォルト・ロケーションについては上記を参照)。また、データベース接続を検証する場合は、InfoCenter にある手順に従うのではなく、WebSphere Portal 5.1 テスト環境を作成してサーバーを始動します。

WebSphere Portal テスト環境バージョン 5.1.0.x のアンインストール

WebSphere Portal テスト環境 5.1.0.x は、グラフィカルなアンインストール・プログラムを使用してアンインストールできます。

WebSphere Portal 5.1 を Windows および Linux システムからアンインストールする場合の詳細な手順については、<http://www.ibm.com/websphere/portal/library> にある WebSphere Portal 5.1 インフォメーション・センターを参照してください。そこには、アンインストール前に実行する必要がある決定および手順についての情報、および手動によるアンインストールなど、その他のアンインストール方法についての情報があります。

グラフィカルなアンインストール・プログラムを使用して WebSphere Portal テスト環境 5.1.0.x をアンインストールするには、以下のようにします。

1. 以下のステップのいずれかを実行し、アンインストール・プログラムを起動します。
 - **Windows の場合のみ:** 「コントロール パネル」にある「プログラムの追加と削除」ウィンドウで、WebSphere Portal を選択します。
 - コマンド・プロンプトからアンインストール・プログラムを開始します。
 - a. 次のディレクトリーに移動します: `portal_server_root/uninstall`
 - b. ご使用のオペレーティング・システムに応じて、次のコマンドを実行します。

- Linux の場合: ./uninstall.sh
 - Windows の場合: uninstall.bat
2. アンインストールを行う言語を選択し、「OK」をクリックします。「ようこそ」パネルが表示されます。
 3. アンインストールするコンポーネントを選択し、「次へ」をクリックします。

注: WebSphere Application Server のアンインストール・プログラムは、意図的にそのルート・レジストリー・キーを Windows レジストリーに残します。

4. 「次へ」をクリックすると、確認パネルが表示されます。
5. 「次へ」をクリックして、アンインストール・プロセスを開始します。アンインストール・プログラムが終了すると、確認のパネルが表示されます。
6. 「終了」をクリックして、アンインストール・プログラムを閉じます。
7. マシンを再始動します。特に同一マシンに再度 WebSphere Portal をインストールする予定がある場合は、これを行っておく必要があります。

WebSphere Portal バージョン 6.0 テスト環境のインストール

ポータル・テスト環境では、WebSphere Development Studio Client ワークベンチからポータル・アプリケーションをテストできます。

Windows と Linux の各ワークステーションにおける WebSphere Portal 6.0 のインストールおよびアンインストールについての詳細な説明、およびシステム要件の詳細については、<http://www.ibm.com/websphere/portal/library> にある WebSphere Portal 6.0 インフォメーション・センターを参照してください。

CD-ROM または電子イメージからの WebSphere Portal テスト環境バージョン 6.0 のインストール

以下の手順は、WebSphere Portal 6.0 をインストールするためのガイドです。詳細については、IBM WebSphere Portal バージョン 6.0 の Information Center (<http://www.ibm.com/websphere/portal/library>) を参照してください。

WebSphere Portal テスト環境 6.0 をインストールするには、以下の手順に従います。

1. 電子イメージからインストールする場合は、すべてのポータル・ディスク・イメージを同じディレクトリーに抽出するか、またはコピーしておく必要があります。25 ページの『ダウンロード・ファイルの抽出』を参照してください。
2. WebSphere Application Server、WebSphere Portal、WebSphere Application Server 統合テスト環境、または WebSphere Portal 統合テスト環境のいずれかをインストール済みの場合は、それらのテスト環境がすべて停止していることを確認するとともに、HTTP サーバーをすべて停止します。停止されていないと、インストールに失敗する場合があります。
3. 以下のいずれかの方法を使用して、WebSphere Portal テスト環境バージョン 6.0 のインストール・プログラムを開始します。

- WebSphere Development Studio Client ランチパッド・プログラム (37 ページの『ランチパッド・プログラムの開始』を参照) で、「**WebSphere Portal V6.0 テスト環境**」をクリックする。
 - WebSphere Portal 6.0 のセットアップ CD を挿入する。Windows システムの場合はインストール・プログラムが自動的に開始します。自動的に開始しない場合、または Linux システム上にインストールする場合は、セットアップ CD またはディスク・イメージのルートから次のコマンドを実行します。
 - Windows の場合: `install.bat`
 - Linux の場合: `install.sh`
4. インストール・プログラム実行時の言語を選択し、「**OK**」をクリックして続行します。
 5. インストール・プログラムのウェルカム・ページの情報を読み、「**次へ**」をクリックします。
 6. ご使用条件および IBM 以外の条項を読みます。同意する場合は、「**IBM 条項および IBM 以外の条項に同意します (I accept the both the IBM and the non-IBM terms)**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。
 7. WebSphere Application Server V6.0 のデフォルトのインストール・ディレクトリを受け入れるか、または新規のディレクトリを参照して選択し、「**次へ**」をクリックします。デフォルトのインストール・ディレクトリは、Windows では `C:\Program Files\IBM\Portal60\UT\AppServer`、Linux では `opt/IBM/Portal60/AppServer` です。容量が不足している場合を除いて、デフォルトのインストール・ディレクトリが推奨されます。
 8. デフォルトの WebSphere アプリケーション・サーバーのプロパティを受け入れるか、または以下を指定します。
 - セル名。
 - WebSphere Portal アプリケーション・サーバーをインストールする WebSphere Application Server セル内のノード。この値は、同一セル内ではノード名間で固有である必要があります。一般には、この値はコンピューターのホスト名と同じです。
 - 完全修飾 DNS 名、短い DNS 名、または WebSphere Application Server を実行しているコンピューターの IP アドレス。ローカル・ホストまたはループバック・アドレスは使用しないでください。
 9. WebSphere Application Server 管理者のユーザー ID およびパスワードを入力します。ユーザー ID およびパスワードではブランクを使用せず、パスワードの長さは短くても 5 文字であることを確認してください。このユーザー ID は、インストール後に管理者権限で WebSphere Application Server にアクセスするときに使用されます。このユーザー ID は WebSphere Application Server にログインするときのみ使用され、オペレーティング・システムそのものにアクセスするときに使用されるユーザー ID とは関係はありません。「**次へ**」をクリックして先に進みます。
 10. WebSphere Portal Process Server をビジネス・プロセスのサポート用としてインストールするかどうかを選択し、「**次へ**」をクリックして続行します。 **重要:** この製品をインストールする目的が、結果ノードを管理対象セルに追加することである場合、またはこのノードをクラスターの一部として使用することである場合は、以下の 2 つのアプローチのいずれかを実行することができます。

- 管理対象セルまたはクラスターでビジネス・プロセス統合のサポートが必要である場合は、デプロイメント・マネージャーに統合されているノードに WebSphere Portal をインストールする必要があります。このインストール・プロセスを終了してから、WebSphere Portal バージョン 6.0 の Information Center のトピック『クラスターのセットアップ』を参照してください。
- 管理対象セルまたはクラスターにビジネス・プロセス統合サポートが不要の場合は、このパネルで「WebSphere Process Server をインストールしない (Do not install WebSphere Process Server)」を選択し、続行してください。

管理対象セルまたはクラスターでビジネス・プロセス統合のサポートが必要である場合は、デプロイメント・マネージャーに統合されているノードに WebSphere Portal をインストールする必要があります。このインストール・プロセスを終了してから、『クラスターのセットアップ』の説明を参照してください。ビジネス・プロセス統合のサポートを含め、WebSphere Portal を管理対象外のノードにインストールすると、後でそのノードを管理対象セルに追加したり、それをクラスターの一部として使用したりすることはできなくなります。

11. Portal Server のデフォルトのインストール・ディレクトリを受け入れるか、または新規のディレクトリを参照して選択し、「次へ」をクリックします。デフォルトのインストール・ディレクトリは、Windows では C:\Program Files\IBM\Portal60\UTE\PortalServer、Linux では opt/IBM/Portal60/UTE/PortalServer です。容量が不足している場合を除いて、デフォルトのインストール・ディレクトリが推奨されます。指定したディレクトリが存在しない場合は、そのディレクトリが作成されます。Windows にインストールする場合は、インストール・パスにピリオド (.) を含めないでください。「次へ」をクリックします。
12. WebSphere Portal 管理者のユーザー ID およびパスワードを入力します。ユーザー ID およびパスワードではブランクを使用せず、パスワードの長さは短くても 5 文字であることを確認してください。このユーザー ID は、インストール後に管理者権限で WebSphere Portal にアクセスするときに使用されます。このユーザー ID は WebSphere Portal にログインするときにのみ使用され、オペレーティング・システムそのものにアクセスする場合に使用されるユーザー ID とは関係がないことに、注意してください。Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) ディレクトリを使用してユーザーの管理を行う場合は、ここで指定した管理者ユーザー ID が、ユーザー ID およびパスワードにおける特殊文字に指定されている推奨事項に準拠していることを確認してください。「次へ」をクリックします。
13. インストールする製品を確認し、「次へ」をクリックします。インストール・プログラムにより、選択したコンポーネントのインストールが開始されます。インストールおよび構成プロセス中は、このインストール・プログラムによってコンポーネントごとにプログレス・バーが表示されます。

注: インストールが完了するまでにしばらく時間がかかることがあります。インストールの全体の進行状況をモニターする場合は、ご使用のプラットフォームのプログレス・バーおよびプロセス・モニター機能を使用してください。

14. CD からインストールしているときにプロンプトが表示された場合は、該当する WebSphere Portal 6.0 CD を挿入し、そのドライブ・ロケーションを指定してください。
15. インストールが終了すると、インストール・プログラムによって、インストールされたコンポーネントがリストされた確認パネルが表示されます。以下の情報を確認してから「終了」をクリックしてください。
 - WebSphere Portal にアクセスするために使用されるポート番号が確認パネルに表示されます。このポート番号は控えておいてください。WebSphere Portal URL を検証するときにこの番号が使用されます。この値は、<ポータル・インストール・ディレクトリー>/config/wpconfig.properties ファイル 内の WpsHostPort プロパティーにも格納されます。
 - WebSphere Portal ファースト・ステップを使用して WebSphere Portal にアクセスする場合は、「ファースト・ステップを起動する (Launch First Steps)」が選択されていることを確認してください。ファースト・ステップから WebSphere Portal にアクセスするか、または WebSphere Portal の文書を参照することができます。
16. 「終了」をクリックします。
17. WebSphere Portal が稼働していることを確認するには、ブラウザで URL `http://example.com:port_number/wps/portal` を開きます。ここで、example.com は WebSphere Portal を実行しているマシンの完全修飾ホスト名で、port_number は、確認パネルに表示されるポート番号です。例えば、`http://www.ibm.com:10038/wps/portal` となります。
18. WebSphere Portal が稼働しています。 **重要:** この時点で、セキュリティーを使用可能に設定して実行中です。

WebSphere Portal 6.0 の使用方法については、IBM WebSphere Portal バージョン 6.0 Information Center (<http://www.ibm.com/websphere/portal/library>) を参照してください。

WebSphere Portal の構成リポジトリとしての DB2、Oracle、または SQL Server データベースの使用

WebSphere Portal テスト環境バージョン 6.0 では、構成、アクセス制御 (ポータル・リソースにアクセスするためのユーザー ID、資格情報、許可など)、およびユーザー・データがデータベースに格納されます。デフォルトでは、WebSphere Portal は Cloudscape データベースをインストールして使用します。ただし、サポートされている別のデータベースを使用することもできます。

WebSphere Portal V6.0 で使用するためにサポートされている別のデータベース (たとえば DB2、Oracle、または SQL Server データベース) をインストールして構成する方法については、WebSphere Portal V6.0 Information Center (www.ibm.com/websphere/portal/library) を参照してください。WebSphere Portal バージョン 6.0 Information Center の「構成」→「データベースの構成」でその手順が説明されています。

WebSphere Portal テスト環境バージョン 6.0 のアンインストール

WebSphere Portal テスト環境 6.0 は、グラフィカル・アンインストール・プログラムを使用してアンインストールすることができます。

WebSphere Portal 6.0 を Windows および Linux システムからアンインストールする場合の詳細な手順については、<http://www.ibm.com/websphere/portal/library> にある WebSphere Portal 6.0 インフォメーション・センターを参照してください。ここには、他のアンインストール方法（たとえば、手動でのアンインストール）だけでなく、アンインストールの計画に関する情報もあります。

グラフィカル・アンインストール・プログラムを使用して WebSphere Portal テスト環境 6.0 をアンインストールするには、以下の手順を実行します。

1. WebSphere Portal 6.0 を Windows および Linux システムからアンインストールするための計画に関する情報を、WebSphere Portal 6.0 インフォメーション・センター (<http://www.ibm.com/websphere/portal/library>) で検討します。
2. 以下のステップのいずれかを実行し、アンインストール・プログラムを起動します。
 - **Windows の場合のみ:** 「コントロール パネル」にある「プログラムの追加と削除」ウィンドウで、WebSphere Portal を選択します。
 - コマンド・プロンプトからアンインストール・プログラムを開始する。
 - a. `portal_server_root/uninstall` ディレクトリーに移動します。
 - b. ご使用のオペレーティング・システムに応じて、次のコマンドを実行します。
 - Linux の場合: `./uninstall.sh`
 - Windows の場合: `uninstall.bat`
3. アンインストールを行う言語を選択し、「**OK**」をクリックします。「ようこそ」パネルが表示されます。
4. アンインストールするコンポーネントを選択し、「**次へ**」をクリックします。

注: WebSphere Application Server のアンインストール・プログラムは、意図的にそのルート・レジストリー・キーを Windows レジストリーに残します。

5. 「**次へ**」をクリックすると確認パネルが表示されます。
6. 「**次へ**」をクリックして、アンインストール・プロセスを開始します。アンインストール・プログラムが終了すると、確認のパネルが表示されます。
7. 「**終了**」をクリックしてアンインストール・プログラムを閉じます。
8. マシンを再始動します。特に同一マシンに再度 WebSphere Portal をインストールする予定がある場合は、これを行っておく必要があります。

ClearCase LT のインストール

Rational ClearCase LT は、小規模なプロジェクト・チーム用の構成管理ツールです。ClearCase LT は、小規模なプロジェクト・ワークグループから分散型のグローバル企業までスケール変更が可能な、IBM Rational ClearCase 製品ファミリーの一部です。

インストール用メディアには、Rational ClearCase LT バージョン 7.0.0.0 が組み込まれています。これは、WebSphere Development Studio Client とは個別にインストールされます。

ClearCase LT をご使用のワークステーションにすでにインストール済みである場合は、現行バージョンにアップグレードできる可能性があります。前のバージョンからのアップグレードに関する情報については、ClearCase LT のインストール資料を参照してください。

WebSphere Development Studio Client が ClearCase LT を処理できるようにするには、Rational ClearCase SCM アダプターのフィーチャーをインストールする必要があります。デフォルトでは、WebSphere Development Studio Client のインストール時にこのフィーチャーは選択されています。ただし、このフィーチャーを組み込まなかった場合でも、IBM Installation Manager の「パッケージの変更」ウィザードを使用して、後から組み込むことができます。詳細は、63 ページの『インストールの変更』を参照してください。

Rational ClearCase SCM アダプターは、処理する前に使用可能に設定しておく必要があります。アダプターの使用可能化および使用についての詳細は、オンライン・ヘルプを参照してください。

ClearCase LT のインストールの説明およびリリース情報の検索

Rational ClearCase LT のインストールに関する詳細な説明については、ClearCase LT のインストール・メディアに収められているインストール資料を参照してください。また、製品をインストールする前に、ClearCase LT のリリース情報を一読されることを強く推奨します。

一部の資料は Acrobat PDF ファイルで提供されています。それらのファイルを開くには Adobe Reader ソフトウェアが必要です。Adobe Reader ソフトウェアは、<http://www.adobe.com/products/acrobat/readstep2.html> からダウンロードできます。

Windows の場合: インストールの説明およびリリース情報は、ClearCase LT のインストール・ランチパッドから表示することができます。95 ページの『Rational ClearCase LT のインストールの開始』を参照してください。

- インストールの説明を開くには、以下のようにします。
 1. Windows の場合: 最初の ClearCase LT インストール CD (または電子イメージのディスク・ディレクトリー) から、`doc\books\install.pdf` を開きます。
IBM Rational ClearCase, ClearCase MultiSite®, and ClearCase LT Installation and Upgrade Guide, Version 7.0 (Windows) が開きます。
 2. Linux の場合: <http://www-1.ibm.com/support/docview.wss?uid=publgi11636> にアクセスして、「*IBM Rational ClearCase, ClearCase MultiSite, and ClearCase LT Installation Guide, 7.0, Linux and UNIX*」をダウンロードします。
- Linux の場合: *IBM Rational ClearCase, ClearCase MultiSite, and ClearCase LT Installation and Upgrade Guide, Version 7.0 (Linux)* が開きます。

IBM Publications Center からの資料の取得

Rational ClearCase LT のインストールの説明およびリリース情報は、IBM Publications Center からダウンロードすることも可能です。

1. <http://www.ibm.com/shop/publications/order> にジャンプします。
2. Publications Center のウェルカム・ページで国/地域を選択します。
3. 「マニュアル検索」をクリックします。
4. 文書タイトルまたは資料番号を対応する検索フィールドに入力します。
 - タイトルで文書を検索する場合は、「キーワード」フィールドにタイトルを入力します。
 - 資料番号 (資料 ID) で文書を検索する場合は、「資料番号」フィールドにその番号を入力します。

表 1. ClearCase の資料番号

資料	資料番号
IBM Rational ClearCase, ClearCase MultiSite, and ClearCase LT Installation and Upgrade Guide (Windows)	GI11-6365-00
IBM Rational ClearCase, ClearCase MultiSite, and ClearCase LT Installation and Upgrade Guide (UNIX)	GI11-6366-00
IBM Rational ClearCase LT リリース ノート	GI11-6369-00

Rational ClearCase LT のインストールの開始

このセクションのインストールの説明は、Rational ClearCase LT のインストール・プロセスを開始する場合に役立ちます。製品をインストールする際は、Rational ClearCase LT のインストール・ガイドにある詳細なインストールの説明を参照する必要があります。インストールの前に、リリース情報を一読されることを強く推奨します。

Windows での Rational ClearCase LT のインストールの開始

1. 以下のいずれかの方法を使用して、Rational ClearCase LT のランチパッド・プログラムを開始します。
 - WebSphere Development Studio Client ランチパッド・プログラム (37 ページの『ランチパッド・プログラムの開始』を参照) から、「**Rational ClearCase LT**」をクリックします。
 - Rational ClearCase LT の最初の CD を挿入します。ランチパッド・プログラムが自動的に開始されます。プログラムが実行されない場合は、最初の CD またはディスク・イメージのルートから、**setup.exe** を実行します。
2. リリース情報をまだお読みでない場合は、一読してください。
3. 「**IBM Rational ClearCase LT のインストール**」をクリックします。Rational ClearCase LT の「セットアップ (Setup)」ウィザードが開きます。

「セットアップ (Setup)」ウィザードの指示に従い、インストールを実行します。

Rational ClearCase LT ライセンス交付の構成

Rational ClearCase LT と同じコンピューターに WebSphere Development Studio Client をインストールした場合は、Rational ClearCase LT ライセンス交付を構成す

る必要はありません。ただし、WebSphere Development Studio Client を使用せずに Rational ClearCase LT をインストールした場合は、ClearCase LT ライセンス交付を構成する必要があります。

ライセンス交付の構成についての詳細は、ClearCaseLT インストール・ガイド を参照してください。

Crystal Reports Server XI リリース 2 のインストール

Crystal Reports Server XI Release 2 は、データ・アクセス、レポート作成、および情報配信用の共通アーキテクチャーです。また、既存のデータ、Web、およびアプリケーション資産と統合するよう設計されています。Crystal Reports Server XI Release 2 は、Crystal Reports をベースとして、多数のユーザーに情報の提供範囲を拡大する際に効果的なソリューションです。

Crystal Reports Server XI Release 2 は、Web を使用して、またはイントラネット、エクストラネット、インターネット、および企業のポータル・アプリケーションに統合して、複雑な対話式のレポートを管理し安全に配布するための、集約化されたプラットフォームです。これは、Windows と Linux の両方で使用可能です。

レポート作成、分析、および情報配信の統合化パッケージである Crystal Reports Server XI Release 2 は、エンド・ユーザーの生産性を向上し、管理作業を削減するソリューションを提供します。

Windows への Crystal Reports Server XI リリース 2 のインストール

このデフォルトのインストールを実行する場合は、すべてのクライアントおよびサーバーのコンポーネントがワークステーションにインストールされます。Central Management Server (CMS) 用の MySQL データベースは自動的に作成されます。デフォルトのユーザーおよびグループの各アカウントが作成され、サンプルのレポートがユーザーのシステムに公開されます。インストールが完了すると、ワークステーション上ではサーバー・コンポーネントがサービスとして開始されます。

Crystal Reports Server XI リリース 2 のすべてのコンポーネントを Windows にインストールするには、以下のようにします。

1. WebSphere Development Studio Client のインストール・ランチパッドで、
「**Crystal Reports Server XI リリース 2 のインストール (Install Crystal Reports Server XI Release 2)**」をクリックします。CD ROM からインストールしている場合は、CD ROM ドライブに Crystal Reports Server XI Release 2 for Windows の最初のインストール・ディスクを挿入するようプロンプトが出されます。
2. WebSphere Development Studio Client のインストール・ランチパッドで、
「**Crystal Reports Server XI リリース 2 のインストール (Install Crystal Reports Server XI Release 2)**」をクリックします。
3. 「セットアップ (Setup)」ウィザードで、セットアップ言語を選択して「**OK**」をクリックします。これは、インストールのプロセスで使用される言語であり、インストールされる言語ではありません。

4. 「ウェルカム」ページで、「OK」をクリックします。
5. 「ご使用条件」のページでご使用条件を参照し、条件に同意する場合は「**ご使用条件に同意する (I accept the license agreement)**」をクリックして「次へ」をクリックします。
6. 「クライアントまたはサーバー・インストールの選択 (Select Client or Server Installation)」ページで、「**サーバー・インストールの実行 (Perform Server Installation)**」をクリックします。

注:

このオプションでは、必要なすべての Crystal Reports Server コンポーネントがインストールされます。「**クライアント・インストールの実行 (Perform Client Installation)**」のオプションでは、クライアント・ツールのみがマシンにインストールされ、そのマシンは Crystal Reports Server 環境のリモートによる管理に使用できます。

7. 「セットアップ (Setup)」ウィザードの指示に従い、「ディレクトリー選択」ページでデフォルトのロケーション (C:\Program Files\Business Objects\BusinessObjects Enterprise 11.5) を受け入れ、「次へ」をクリックしてステップ 9 に進みます。
8. デフォルトのロケーション以外のドライブにインストールする場合は、Crystal Reports などのビジネス・オブジェクト製品でも使用される共用ファイルのインストール用ドライブの選択が「セットアップ (Setup)」ウィザードにより要求されます。デフォルトのシステム・ドライブにファイルをインストールすることなく、複数のビジネス・オブジェクトを同一のマシンにインストールする場合は、最初に Crystal Reports Server をインストールします。引き続き Crystal Reports をインストールすると、Crystal Reports Server により作成された共通ファイル・ディレクトリーが使用されます。
9. 「インストール・タイプ (Install Type)」ページで、「**新規**」をクリックして以下のステップを実行します。
 - ・ ご使用の CMS データベースとして MySQL データベースをインストールする場合は、「**MySQL データベース・サーバーのインストール (Install MySQL database server)**」をクリックし、「次へ」をクリックしてステップ 10 に進みます。これが推奨されるインストールです。
 - ・ CMS 用に Oracle または Sybase など別のデータベースを使用する場合は、「**既存のデータベース・サーバーを使用 (Use an existing database server)**」をクリックして「次へ」をクリックします。

既存のデータベース・サーバーの使用方法に関する情報および説明については、「BusinessObjects Enterprise Installation Guide」を参照してください。この情報は、『New installation』という名前のセクションの『Installing BusinessObjects Enterprise on Windows』の章にあります。

10. ご使用の CMS データベースとして MySQL データベースをインストールすることを選択した場合は、以下のステップを実行してください。
 - a. ポート番号を入力します。
 - b. MySQL の root ユーザー・アカウントで使用するパスワードを入力し、確認してください。

- c. CMS データベースへのアクセス用のデフォルト・ユーザー名を受け入れるか、またはデフォルト名を指定変更して新規のユーザー名を入力してください。
 - d. CMS データベースへのアクセスに使用するパスワードを入力し、確認してください。
 - e. 「次へ」をクリックします。
11. 「Web コンポーネント・アダプター・タイプの選択 (Choose Web Component Adapter Type)」ページで、以下のステップのいずれかを実行します。
- Java Web コンポーネント・アダプターのみを使用し、独自の Java アプリケーション・サーバーを使用する場合は、「**Java アプリケーション・サーバー (Java application server)**」をクリックして「**事前インストールの Java アプリケーション・サーバーを使用 (Use preinstalled Java application server)**」をクリックし、「**IIS ASP.NET**」チェック・ボックスをクリアして「次へ」をクリックし、ステップ 13 に進みます。
 - Java Web コンポーネント・アダプターのみを使用し、Tomcat をインストールする場合は、「**Java アプリケーション・サーバー (Java application server)**」をクリックして「**Tomcat アプリケーション・サーバーをインストール (Install Tomcat application server)**」をクリックし、「**IIS ASP.NET**」をクリアして「次へ」をクリックし、ステップ 12 に進みます。
 - IIS ASP.NET Web コンポーネント・アダプターのみを使用する場合は、「**Java アプリケーション・サーバー (Java application server)**」チェック・ボックスをクリアして「**IIS ASP.NET**」チェック・ボックスを選択し、「**Web サイトの選択 (Choose website)**」のリストでデフォルトを受け入れるか、または WAR ファイルのデプロイ先の Web サイトを選択し、「次へ」をクリックしてから、ステップ 13 に進みます。
 - Java および IIS ASP.NET の両方の Web コンポーネント・アダプターを使用する場合は、「**Java アプリケーション・サーバー (Java application server)**」および「**IIS ASP.NET**」の両方を選択し、「**Web サイトの選択 (Choose website)**」のリストでデフォルトを受け入れるか、または WAR ファイルのデプロイ先の Web サイトを選択し、「**事前インストールの Java アプリケーション・サーバーを使用 (Use preinstalled Java application server)**」または「**Tomcat アプリケーション・サーバーをインストール (Install Tomcat application server)**」のいずれかをクリックして「次へ」をクリックし、ステップ 12 またはステップ 13 に進みます。
12. Tomcat アプリケーション・サーバーのインストールを選択した場合は、デフォルトを受け入れるか、またはデフォルトのインストール・ロケーションを変更して接続ポート、シャットダウン・ポート、およびリダイレクト・ポートを構成し、「次へ」をクリックします。

注:

BusinessObjects Enterprise 6.x のデプロイメントと同じマシン上に Crystal Reports Server をインストールしている場合は、デフォルトのポート番号 8080 は別のデプロイメントで既に使用されている可能性があるため、ポート番号 8080 は使用しないでください。

13. 「インストールの開始 (Start Installation)」ページで、「次へ」をクリックします。インストールが開始されます。インストールのプロセスにおいて、マシンをリブートし、製品を登録するプロンプトが出されます。
14. 「セットアップ (Setup)」ウィザードの最終ページにおいて、Crystal Reports Server に独自のレポートをすぐに公開する場合を除き、「**BusinessObjects 管理コンソールを起動 (Launch BusinessObjects Administration Console)**」をクリックして「終了」をクリックします。

Crystal Reports Server XI リリース 2 のアンインストール

Crystal Reports Server XI リリース 2 をアンインストールするには、以下のようになります。

1. 「スタート」 → 「設定」 → 「コントロール パネル」とクリックします。
2. 「コントロール パネル」ウィンドウで、「プログラムの追加と削除」をクリックします。
3. 「プログラムの追加と削除」ウィンドウで、「**Crystal Reports Server XI リリース 2 (Crystal Reports Server XI Release 2)**」を選択し、「削除」をクリックします。

特記事項

© Copyright IBM Corporation 1992, 2007. All rights reserved.

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものであり、本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。IBM 製品、プログラムまたはサービスに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない機能的に同等の製品、プログラムまたはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-8711
東京都港区六本木 3-2-12
IBM World Trade Asia Corporation
Intellectual Property Law & Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任または保証条件は適用されないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、予告なしに改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

Intellectual Property Dept. for WebSphere Software
IBM Corporation
3600 Steeles Ave. East
Markham, Ontario
Canada L3R 9Z7

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのもと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

著作権使用許諾

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。 © Copyright IBM Corp. 1992, 2007. All rights reserved

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

- AIX
- AIX 5L
- CICS
- ClearCase
- ClearCase MultiSite
- Cloudscape
- DB2
- i5/OS
- IBM
- IMS
- iSeries
- OS/390
- OS/400
- Passport Advantage
- POWER
- POWER5
- PowerPC
- pSeries
- Rational
- Rational Unified Process
- RequisitePro
- RS/6000
- RUP
- System i
- System i5
- VisualAge
- WebSphere
- z/OS
- zSeries

Intel、Itanium、Pentium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Microsoft、Windows および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。



Printed in Japan

GI88-4402-01



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12